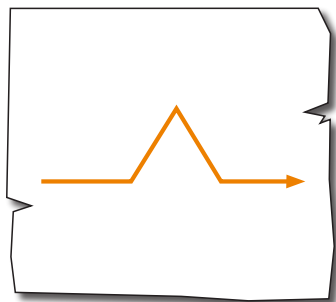


7 THE 7 FRAMES FOR All LIFE

7つのワクワク枠

みんなのコンパス③

第7フレーム



木岬 さんぽ
KIMISAKI SAMPO

何十倍、何百倍も
うれしいのです。

恋人^る溜^ね音、おじいさん…と愛し合う
青年期さんぽのフルーツフル果実物語

SAMPO FRUITS



みんなのコンパス③

『  』

プロローグ

232

瑠音は興奮気味に話した。「すごいじゃない！ ついにナゾが解けたじゃない！

きつと、これらこそが探求めた“究極の意味”よね？

マクロの社会現象も、等身大の人生現象も、頭脳における思考現象も、心身における感情現象も、身体の生理現象も、ミクロの生命現象も含むライフ現象も、物理学や化学が扱う物質現象も——

社会科学も人文科学も自然科学も——

つまりは、文も理も、共通の土台の上で説明できるんですもの。

すごいことよ。きつと大発見よ！ 早く世の中に発表しましょうよ！」

「——。——本当に、これらだけでいいのだろうか？」と僕。

「え？ ——どうして？」

「だって—— まだ何かが足りないような気がするんだ」

「——え？」

「まだ、ライフのバズルを解く究極のカギではない気がするから」

「——そうね」

「それに、知識アップだけでなく、知恵アップやフルーツ育てにも貢献したいんだ。“世の中のためのみんなのために、みんなが満足できるフルーツ”のような、おいしさにつなげたいんだ。

——山は越えたから、あとは、もうちょいさ」

「うん♪」

233

その日の晩、自分のアパートのベッドの上で仰向けになりながら、あれこれ思いめぐらせた。

これまででは、第7フレームに加え——、

第1フレーム『カタチ コトバ カラダ アタマ』のすべて、

第2フレーム『カコ イマ ミライ』の中の『カコ』、

第3フレーム『→』、

第4フレーム『In Out』、

第6フレーム『Off On』を利用した考察が、メインだった。

知恵アップやフルーツ育てにつながることを考えるためには、きつと、第5フレーム『Against For』の中の『For』、および、第2フレーム『カコ イマ ミライ』の中の『イマ』や『ミライ』が、より大事になるだろう。

『イマ』——

自然破壊の問題

かんきょうおせん もんだい
環境汚染の問題

きょくたん きこうへんどう もんだい
極端な気候変動の問題

しゅ ぜつめつ もんだい
種の絶滅の問題

さまざまなたうそう もんだい
さまざまな闘争の問題

…

いろいろなもんだいが、にんげんしゃかいにんげん
人間社会レベルのライフ、人間レベルの

ライフを含むぜんじんるいまえやまず
ぜん人類の前に山積みになっている。

それでは、『ミライ』はどうなるのだろうか？

はたして、にんげんしゃかいにんげんふく
人間社会レベルのライフ、人間レベルのライフを含む
ぜんじんるいながそんぞく
ぜん人類は、このまま長く存続できるのだろうか？

それとも——

…

いまに
今、みんなのために何ができるのだろうか？

…

そして——

ふと、るねかいわとうじょう
溜音との会話で登場した“かわいたちくん”ことをおもだ
出したんだ。

ニホン・カワウソ——

ぜつめついかれかのじょ
絶滅したと言われている彼女ら——

…

さらに、ランプベリーのこともおもだ
出した。

ランプベリーとともにすごしたしあわせなひび
日々——。

ランプベリーのおかげでたのまおもで
楽しさが増した思い出たち——。

ランプベリー

…

さらに、コンパス一家のこともおもだ
出した。

あの出会いは、いったい、何だったのだろうか？

あの出会いは、なにを意味していたのだろうか？

かれかのじょなにも
彼ら彼女らは、いったい何者たちだったのだろうか？

…

——あっ！

そのとき、ハッとしたんだ。

——そうだ！ けつぎやくにんげんしゃかい
結局は、人間社会レベルのライフまでしか見てい
なかったんじゃないか？

——もし、ちきゅうじょういものふく
地球上のあらゆる生き物たちを含む、すべてのライフ
を“進化の最前線”と見なしたら、どうなるだろう？

ほかの生き物たち、ほかの種も視野に入れることで初めて見える
なになんげんしゃかい
何か。人間社会レベルよりも、さらにズーム・アウトすることで
はじみなに
初めて見える何か。…

それらも、きっと、あるはずだ！

ほうこうかかかそくてきふか
この方向づけは、考えが加速的に深まるきっかけとなった。

せいかにじかんじやく
それなりの成果へと熟すまで、時間は、さほどかからなかった。

音楽——テーマ曲イン

♪ハーモニー Harmony

タイトル流れて

——音楽フェード・アウト

234

音楽イン ♪春 Spring

桜が満開となったのは、それから1週間ほど経ってからだった。

その満開のタイミングに、ちょうど、ふたりの都合が合ったので、瑠音と僕は、お花見デートをすることにした。陽光に透ける桜の花びらたちは、瑠音の魅力を増幅しているようにも思われた。

お花見デートのゴール地点は、春の海辺だった。

浜辺に座っているふたり——。

ちょうど、そこはコンパース一家と別れた場所でもあった。

ザブーン、ザザザシュー …

「そう言えば、あの成果、楽しみよね。あれから、私、どうなるか、ずっと楽しみにしていたわ」と瑠音。

「ありがとう。——あれから、思いのほか考えがぐんぐん進んで、割と早くからも大事な成果が得られていたよ」と僕。

「それは、何？」

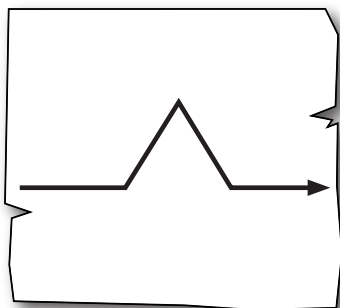
「人間社会レベルの3ステップからズーム・アウトすると見える、さらに高次レベルの3ステップさ」

「え？ ——知りたい。知りたい♪」

「うん。順を追って説明するよ。」

まず、“人類という種を構成する人間” どうしが関わり合うことで人間社会レベルの3ステップが成立するように、“動物や植物、細菌などの種を構成する個体” どうしが関わり合うことで個体社会レベルの3ステップが成立する——」

第7フレーム



「**个体社会レベル**——」

「そうさ。この**个体社会レベル**の3ステップは、アリやハチなどの**社会性昆虫**とか、チンパンジーやゴリラなどの**社会性の高い霊長類**とかを構成する**个体**どうしの間だけで成立するとは限らないよ。

少なくとも、**有性生殖**するならば、すなわち、“オスとメス”の**関わり合い**で**繁殖**するならば、少なくともこの時点で**个体**どうしが**関わり合**っているわけだから、これだけで**个体社会レベル**の3ステップが成立していることになる。まあ、これは、わりとイメージしやすいと思うけど——」

「—— **桜の花びら**のように、**かすかに色づく彼女の類**——。

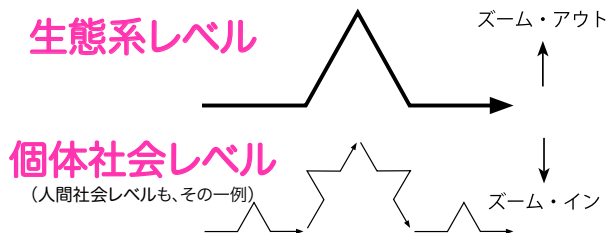
「って、別にイメージしなくてもよくて——」あわててフォローし、話を続けた。「たとえば、**無性生殖の生物**であっても、**个体社会レベル**の3ステップが成立しているよ。なぜって、**無性生殖の生物**の場合も、ある**个体**が**生殖し続けられる**かどうか、**栄養分**や**日光**などの**エネルギー**が**限られている**がゆえに、**周囲に存在する同種の个体**の存在に**影響**されることになるのだから」

「——つまり、少なくとも**生殖**していれば、**有性が無性**に関係なく、あらゆる種において**个体社会レベル**の3ステップが**成立**しているのね？」

「その通り。“少なくとも”だから、**育児**や**経済活動**を含む**生殖**以外の営みにおいても、**个体社会レベル**の3ステップが**成立**していることがありうる。もちろん、この**个体社会レベル**の3ステップの1例として、**人間社会レベル**の3ステップも含まれているよ」

「——ええ、そうね」

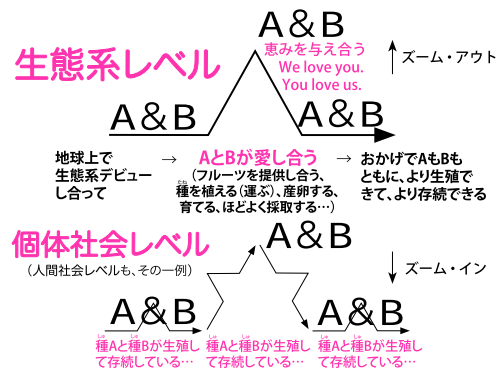
「それで、いよいよ、この“**人間社会レベル**を含む**个体社会レベル**の3ステップ”から**ズーム・アウト**すれば、さらに**高次レベル**の3ステップ、**生態系レベル**の3ステップが見えてくるんだ」



「**生態系レベル**——」

「そう。——たとえば、種A」と種Bが**支え合**って**成立**している**生態系**

レベルの3ステップは、次のように示すことができるよ」



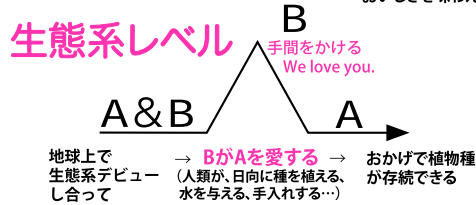
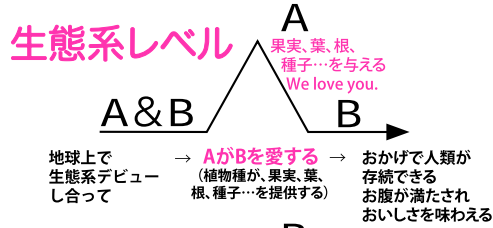
「この**生態系レベル**の3ステップも、**人間社会レベル**の3ステップと、よく似ているね」

「そうさ。フラクタル的に**相似**だからね。だから、**生態系レベル**の**ライフ**の**成立**——**誕生**や**存続**を決めるカギの1つは、やっぱり、『**Love - Love**の**関係**』の**構築**なんだよ。**人間社会レベル**の**ライフ**のときと同様に——」

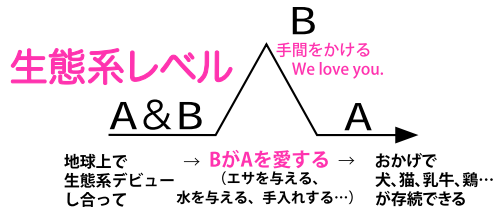
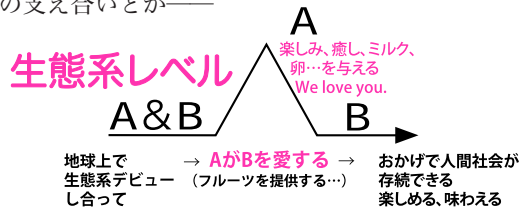
「『**Love - Love**の**関係**』♪」
音楽 ♪春 Spring 235 に続く

235

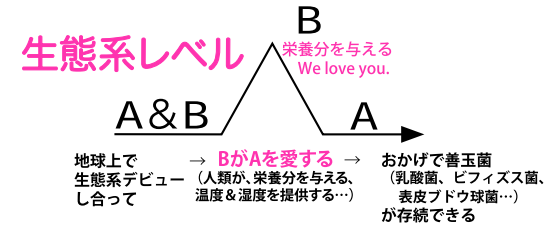
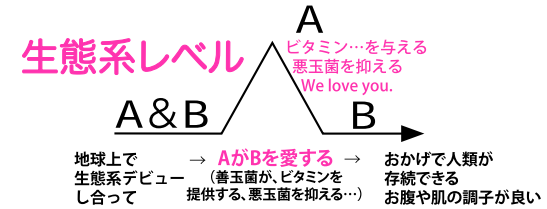
「例えば——」と話し始める僕。「果実類や野菜類、穀類や豆類など、恵みを与えてくれる植物種と、人類という種の支え合いとか——」



飼い犬や飼い猫のおかげで楽しみが増えるとか、乳牛や鶏のおかげでケーキが食べられるとか…恵みを与えてくれる動物種と、人類という種の支え合いとか——



さらには、乳酸菌やビフィズス菌、表皮ブドウ球菌を含む、恵みを与えてくれる細菌類の種と、人類という種の支え合いとか——」



「へえー。つまり—— ある種とある種の間のおおの恵みの与え合いが、『Love - Love の関係』の構築を実現して—— そのおかげで、生態系レベルの3ステップスが成立しているのね？」と溜音。

「その通りさ。この『Love - Love の関係』の構築のおかげで、生態系レベルのライフが誕生し、存続しているのさ」

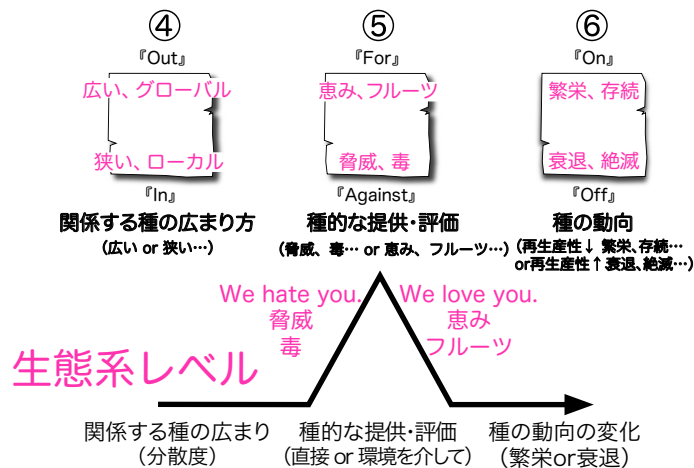
「このことが、人間社会レベルのライフの場合と似ているのは、まさにフラクタル的に相似だからなのね？♪」

「その通り！」

音楽 ♪春 Spring 236 に続く

236

「生態系レベルの3ステップの意味についても、第4フレームから第6フレームまでを考え合わせると、わかりやすくなるよ」と僕。



「ええ、よくわかる気がする——。」

それぞれのステップの意味についても、人間社会レベルの3ステップの場合とフラクタル的に相似なんですよ？」と瑠音。

「そう、まさに、その通り！」

だから、例えば、第1ステップは——まさに、人間社会レベルにローカルなものグローバルなもの両方があるのと同じように、生態系レベルにもローカルなものグローバルなもの両方あることを意味しているんだよ」

「アハッ♪ やっぱり——」

「この『In Out』は、関わり合う種が、どれだけ広く分布してい

るかかってこと、いわば、分散度を示しているんだ」

「あ！ そうすると——例えば、人類という種は、南の果てから北の果てまで生息地を拡大しながら、ほかのさまざまな種と広く関わっているから、どちらかと言ったら『Out』の方向にいるのね？」

「そうだね。」

さらには、生息地の広がりに関係なく、例えば、人類がもたらす大気への影響が地球全体に及びうという意味でも、人類は『Out』の方向にいると思うよ」

「——そうすると、生息地が限られていても、植物種がもたらす大気への影響も地球全体に及びうるから、その意味で植物種も『Out』の方向にいるのね？」

「そうさ。だからこそ、“地球上のすべての生き物や地球環境を含む、まるごと全体が1つの生態系レベルのライフである”という見方も成り立つんだよ。まあ、それがグローバル生態系ってやつだね」

「——じゃあ、グローバル生態系の逆が、ローカル生態系なのね？」

「そうさ。例えば、果物と僕の関係、ランベリーと僕の関係、お腹の中の細菌と僕の関係… が、ローカル生態系だよ」

「よくわかるわ」

「うん。それで、第2ステップは——ある種が、ほかの種へと恵み、あるいは、脅威を与えるってこと。」

具体的には——

“植物種が、二酸化炭素を吸収して酸素を作り出して、動物種にとって有用な空気を提供してあげる”とか

“ある植物種が、果実を実らせて、ある動物種に食糧を提供してあ

げたり、その動物種が、その果実の中の種を遠くへ移動させて、その植物種の生息地を拡大させてあげたり”とか、

“ある植物種が、ある動物種に巣の材料を提供してあげる”とか…
恵みを与えたり——

音楽フェード・アウト ♪春 Spring

いっぽう
一方で

音楽イン ♪冬 Winter

“ある動物種が、環境破壊や急激な気候変動を引き起こして、すべての種の生存を脅かしてしまう”とか

“ある動物種が、食糧となる生物を乱獲して減少させたり、その食糧となる生物の減少が、その動物種を飢餓によって減少させたりする”とか

“ある有害な種だけがが増えて、有用な種が減ってしまう”とか…
脅威を与えたりするってこと」

「——うん。そうすると、もちろん—— 恵みが『For』の方向なら、脅威が『Against』の方向なのね？」

「その通りさ。」

それで、例えば、人類という種は、ほかの、さまざまな種から、これまで実に多くの恵みを受け続けた。食糧、燃料だけでなく、空気や土壌、海…も含めて実に多くの恵みを」

「ええ、そうね。 そのおかげで繁栄できたのね」

「でも、それは多くの場合、人類が、ほかの、さまざまな種に対して、同時に単に脅威を与え続けていたということでもあった」

「え？」

「例えば、乱獲、樹木の乱伐、環境汚染、急激な気候変動…は、人

類が、単に脅威を与え続けていたことに相当しているんだよ」

「——。 ——そうね。“かわいたちくん”たちにとっての、乱獲や河川環境の悪化…は、まさに人類による脅威だったのね」 彼女は、沈みながら言った。

「ああ」 僕も、沈みながら言った。

「——だから、第3ステップは、恵みや脅威を受けた種が繁栄するか衰退するか、“存続するか絶滅するか”…のような『Off On』で示される内容を持っているのね？」

「そうさ。もちろん、それは、いずれ“人類自身がどうなるか”ってことでもある」

「——え？」

音楽 ♪冬 Winter 237 に続く

237

「人類という種は、周囲の種に脅威を与え続ければ、周囲の種を衰退させてしまうだけでなく、周囲の種から脅威を与えられ続けることによって、いずれ自身も衰退してしまうってことさ。周囲に脅威を与え続けながらの繁栄は、一時的な偽の繁栄なのさ」と僕。

「いずれ自身が衰退してしまう、偽の繁栄——」と瑠音。

音楽フェード・アウト ♪冬 Winter

「そう。まあ、逆に言えば——

音楽イン ♪春 Spring

周囲の種に恵みを与え続ければ、周囲の種を長く繁栄させられるだ

けでなく、周囲の種から恵みを与えてもらい続けることによって、
自身も長く繁栄するってことさ。周囲に恵みを与え続けながらの繁
栄こそが、長期的な本物の繁栄なのさ」

「後半の逆にとらえた方の説明は、結局、『Love - Loveの関係』
が作られれば、繁栄しやすくなるってことで、やっぱり人間社会レ
ベルの場合と似ているね？」

「そうさ。何せ、フラクタル的に相似だから——。

つまり、生態系レベルのライフを構成する各種がどれほど長く存
続できるかどうかについても、『Love - Loveの関係』をどれほど
構築できているかが決定するんだよ」

「それは、恋愛関係や経済活動を含む人間社会レベルのライフを構
成する各個人がどれほど長く存続するかどうかについて、『Love -
Loveの関係』をどれほど構築できているかが決定することと同じ
なのね？ フラクタル的に相似だから——」

「その通りだよ。

この『Love - Loveの関係』の構築に、より成功した種が、より
長く存続すること—— これは、進化論の根幹である『自然選択
(Natural Selection)』の本質の1つだと思ふよ。

そもそも自然選択のヒントとなった人為選択においても、まさに、
人類との『Love-Loveの関係』を構築できた種が選ばれて生き残っ
ているわけだし—— ここにあるのは、ゆるぎない自然法則の1つ
なのさ」

「——ええ、言われてみれば、そうよね。実際、たとえ、さまざま
なハンディキャップを背負っておられても、『Love - Loveの関係』

を構築することによって、大いに活躍されている方々が、たくさん
いらっしゃるわけだし—— 生まれたばかりの赤ちゃんが、本来と
ても弱い存在なのに生存し続けられるのは、その保護者と『Love -
Loveの関係』を構築するからにほかならないわけだし—— それ
は、確かに的を得た説明だと思ふわ」

「そうだね。そう同意した後、ふいに、コンパルクルちゃんが赤ちゃ
んだった頃のことを思い出した。——とても弱い！？」

「——ま、コンパルクルちゃんの赤ちゃん時代は、例外だけだね。
アハハッ♪」

「アッハッハッ！」 笑い合うふたり——

『Love - Loveの関係』の

構築——

これを達成している存在が

なが 長く存続する

238

瑠音と僕は、しばらく、ぼんやりと水平線の方を眺めていた。

「『Love - Love の関係』の構築が長い存続につながることは、地球上の生態系レベルのライフや人間社会レベルのライフだけに限らず、さらに広い範囲で成り立つ可能性がありそうだよ」僕は、意を決して言った。

「——え？ さらに広い範囲？」聞き返す瑠音。

「そう。——これから、あくまで“もしも”の話をするよ。

“もしも”の——」

「ええ、なあに？」

「もしも——あのコンパース一家、あるいは、その祖先たちの出身が、ほかの天体の生態系だったとするよ」思い切って話してみた。

「——」きょんとしている瑠音。

「もちろん、彼ら彼女らの出身が地球の生態系である可能性もあるから、あくまで、“もしも”の話だよ」

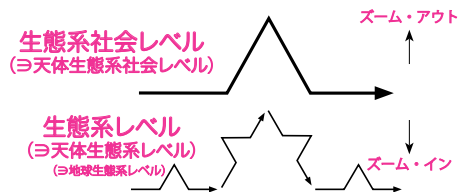
「——ええ、“もしも”の話ね。“もしも”の——」と言いながら数回うなずく彼女。

「もしも、あのコンパース一家、あるいは、その祖先たちの出身が、ほかの天体の生態系だったら、どうなるか？」

「——どうなるの？」

「さらに高次レベルの3ステップス、天体生態系レベルを含む、生態系社会レベルの3ステップスを考えられることになるのさ。

それは、地球生態系レベルを含む、生態系レベルの3ステップスからズームアウトすることによって見えてくるレベルだね」



「——コンパース一家って異星人たちだったの!？」瑠音は、驚きながら言った。

「ゴホッ、ゴホッ、ゴホッ… だから、僕にもわからないよ。あくまで“もしも”の話だよ。“もしも”の——」

「ええ、“もしも”のね。“もしも”の——」再びうなずきを繰り返す彼女。

「僕が言いたいのは、生態系社会レベルのライフという“もしも”の話においても、『Love - Love の関係』を構築できる存在こそが長く存続するという結論が変わらないってことさ」

「——」

「なぜって、フラクタル的に相似だから——」

「——」

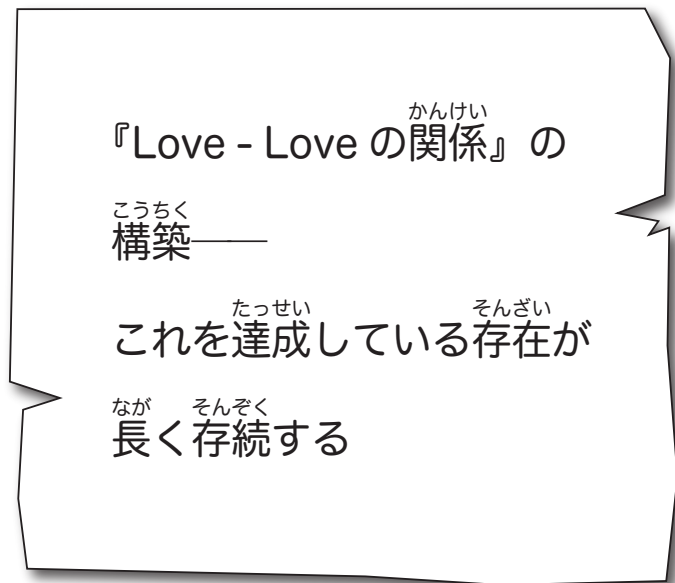
「それに、実際、僕らの関係がコンパース一家のおかげで長く存続している一面を持っていて、コンパース一家が僕らのおかげで長く存続している一面を持っていることも、まさに、もしもの生態系社会レベルにおいても『Love - Love の関係』を構築できる存在が長く存続するという結論を支持している——」

「——フフッ♪ もしコンパース一家のルーツが本当に、ほかの

天体だったとしたら、なんだか、おかしいよね？ 私たち、知らぬ間に、異星人たちと『Love - Love の関係』を築いていたことになってるんですもの——

「そうだね」

それから、しばらくの間、コンパス一家との思い出話に花を咲かせた僕らは—— 再び、ふたりして、ぼんやりと水平線の方を眺め続けた。



音楽 ♪ 春 Spring 239 に続く

239

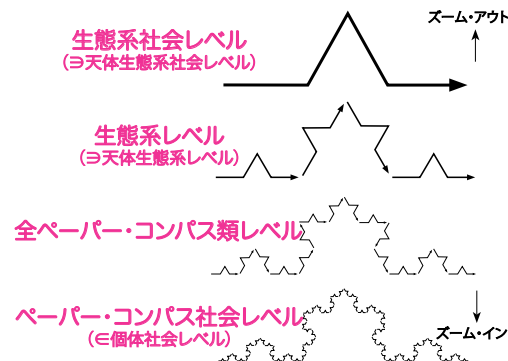
「もしもコンパス一家が異星人だったら説」のおかげで得られる結論は、ほかにもあるよ」話を広げる僕。

「それは、なあに？」聞き返す増音。

「それは、さまざまなペーパー・コンパス社会たちは、お互いに恵みやフルーツを与え合って『Love - Love の関係』を構築して、健やかな全ペーパー・コンパス類レベルのライフという、さらに高次レベルのライフに至っているはずだってことさ」

「——え？」

「さまざまなペーパー・コンパス社会たちは、『Love - Love の関係』を構築して、健やかなペーパー・コンパス社会レベルのライフ、生態系レベルのライフ、天体生態系社会レベルのライフに至っているだけでなく、健やかな全ペーパー・コンパス類レベルのライフにも至っているからこそ、あれほどの高度な科学文明に到達しながら長く存続できて、僕らと出会うこともできていたはずだってことさ」



「——」

「だから、今の地球の科学レベルをはるかに超える高度な科学文明に到達しながら、われわれに出会えるほど長く存続しているライフが、もし実在しているならば、少なくとも、『Love - Love の関係』を構築することの重要性を知っているはずで、本来、さまざまな意味で『Love - Love の関係』を構築しようと実践し続けているはずなんだよ。

例えば、それほど高度な科学文明に到達しているライフが、もし実在して、新たな天体にたどり着いたなら、その暁には—— そこに存在する天体生態系との間に『Love - ove の関係』を構築して、天体生態系社会レベルのライフを育むことこそを、第一目標にするはずなんだよ。

音楽フェード・アウト ♪春 Spring

もし、その第一目標を変更するとすれば、新たな天体に存在する“彼らにとっての異星人”が、彼らに対する、あるいは、天体生態系社会レベルのライフに対する脅威となり続けてしまうような、やむにやまれぬ非常事態に限ると思うよ。

健全な免疫細胞たちがもたらす、発熱を含む本格的な活動が、本来、個体レベルのライフが脅威を受け続けるような、やむにやまれぬ非常事態に限るように——

「——」再び、きょとんとしている瑠音。

「だから、“もしも”の話だよ。“もしも”の——」

「ええ、そうよね。“もしも”の話——。——でも、たとえ“もしも”の話だとしても、学べるのが、いっぱいありそうね？」

「ああ、そうだね」

240

その後、しばらくの間、瑠音と僕は水平線の方を眺めた。

今度は、瑠音が最初に口を開いた。「ねえ、そうすると、今の地球上で生きている種のすべては、個体社会レベルだけでなく、少なくとも生態系レベルにおいて『Love - Love の関係』の構築に成功し続けているのね？」

「うーん。一部は正しいけれど、一部は正しくなさそう」と僕。

音楽イン ♪冬 Winter

「え？ どういうこと？」

「例えば、人類という種と、人類にとって有用な特定の周囲の種——植物たちや動物たち、細菌たちが、『Love - Love の関係』の構築に成功し続けているおかげで、これまでお互いに存続しているという意味では、確かに正しいよ。

でも一方で、人類という種が、別の周囲の種との間で『Love - Love の関係』の構築に失敗し続けている真っ最中でもありうるという意味では、正しくないんだよ。

なぜなら、これまで、決して成功だけが続いてきたわけではなく、失敗もあったから」

「——え？」

「例えば、オオナマケモノとの関係。例えば、ダイカイギュウとの関係。例えば、オオウミガラスとの関係。例えば、ブルーバックとの関係。例えば、リョコウバトとの関係。……

そして、例えば、ニホン・カワウソとの関係——。

これらはどれも、人類が『Love - Love の関係』の構築に失敗し

でしまっていた例に、ほかならなかったのさ」

「——」

「例えば、かつて人類とニホン・カワウソが同時に生存していた時代が確かにあった。でも、その時代の関係は決して『Love - Love の関係』ではなかったのさ。なぜなら、結果的に一方だけが存続して一方だけが絶滅してしまったのだから。

一方の種だけが存続して、一方の種だけが絶滅してしまったことは、その“同時に存在していた時代”の人類とニホン・カワウソの関係の大部分が『Love - Love の関係』ではなかったことを証明しているのさ」

「——」

「だから、たとえ現在、この地球上の生態系レベルのライフの中で同時に生存しているからといって、互いに『Love - Love の関係』の構築に成功し続けているとは限らないんだよ。

例えば、たった今、同時に生きていても、ある種とある種の間に構築されている関係が『Love - Hate の関係』や『Hate - Hate の関係』であることも十分にありうるのさ」

「だから、今同時に生きていれば、『Love - Love の関係』の構築に成功し続けているはずだという考えは、正しくないのね——」

音楽 ♪冬 Winter 241 に続く

241

「そうすると、過去に構築されていた『Love - Hate の関係』の例

が、人類とニホン・カワウソの関係だったのね？」と瑠音。

「そう。かつて、ニホン・カワウソは、人類が登場するまでは、生態系レベルのライフ一部として、長い間『Love - Love の関係』の構築に成功し続けていた。

でも、人類のような未熟で困った種が新たに出現したせいで、『Love - Hate の関係』を強いられ続けた。その結果、絶滅の脅威にさらされ続けただけでなく、本当に絶滅してしまったんだよ」と僕。

「——」

「ここにあるのは、決して、“人類が強くて優秀だから”と誇らしく説明すべきことじゃない。とんでもないよ。全く逆だよ。“人類が、自身のこと、今のこと、目の前のことしか考えられないほど愚かだ——” かつての自分自身の愚かさと同じ？ 「知恵を欠いていたから」と説明するべき、大恥、かつ、大損だよ。なぜって、人類が十分に早いタイミングで『Love - Love の関係』の構築を目指す方向へと舵を切ってあげていたならば、ニホン・カワウソは今も存続できていたはずで、人類とニホン・カワウソは、お互いに豊かな恵みやフルーツを得られ続けたはずだから——」

「——。そっか——」 瑠音の声は、しずんでいた。

「——」

「ハア——。——もしかしたら、ニホン・カワウソが、せっかく当時の人類をずっと愛し続けてくれていたのに、当時の人類は、ニホン・カワウソをずっと愛してあげなかったことになるのかな。

だとしたら、悲しいね。とつても——」 彼女の目が少し潤んでいるのがわかった。

「——ああ、確かに悲しいね」 もらい泣きしそうになった。

音楽フェード・アウト ♪冬 Winter

海辺がキラキラし始めている——。

「——ねえ。人類という種が、周囲の種と『Love - Love の関係』を構築することは、周囲の種にとってだけでなく、人類自身にとっても、将来長く存続するために重要なんですよ？」と瑠音。

「その通りだよ。周囲の種も大事にして『Love - Love の関係』を構築することこそが、本当の意味で人類自身を大事にすることにつながっているんだ。

もし人類という種が自身だけを大事にして、恵みやフルーツを受けとることばかりを望んで、周囲の種へ脅威を与え続ける一方ならば——長い目で見て、周囲の種の絶滅によって恵みやフルーツを受け取れなくなることを含めて、脅威を受け続けることになり、人類自身が衰退して、将来長く存続できなくなるから」と僕。

「じゃあ、周囲の種と『Love - Love の関係』を構築するために、私たち人類はどうしたらいいの？」

「僕ら人類がすべきことは、ただ1つ——周囲に脅威を与えながら繁栄・存続しようと無理にもがくのではなく、周囲に恵みやフルーツを与え続けながら堂々と繁栄・存続することなんだ。

それは、人類という種自身も、周囲の種も、両方を大事にし続けること、両方を愛し続けることなんだ。

人類という種と周囲の種たちの総和が生態系だから、つまり、

「For 生態系」を目指し続けなければならないのさ」

「For 生態系——」

「この“For 生態系”の方向で進めば、人類という種は、周囲の種たちと『Love - Love の関係』を構築できて、人類という種自身も、周囲の種たちも、つまりは、生態系レベルのライフも存続できるんだよ」と僕。

「でも——そんなことが本当にできるの？」

もし人類が、周囲の種たちから恵みやフルーツを受け取りながらこのまま発展し続けられれば、それだけでも、周囲の種たちにとって脅威になりうるんでしょ？ だったら、人類という種は発展しなければいけないことになるでしょうし——。かといって、人類が発展しないなんて、たぶん無理でしょうし——。

だとしたら、やっぱり——。——」と瑠音。

「でも、人類という種が発展すること自体は、必ずしも悪くないよ。って言うか、むしろ発展するべきなんだよ」

「——え？」

「大事なのは、発展する際の“方向”なのさ」

「方向？」

「そう。もしその発展する際の“方向”が——例えば、より大きく、より多く…のような“やみくもな成長の方向”、つまり、“やみくもな『On』の方向”であれば、当然、改善される必要があるよ。第一、“やみくもな『On』の方向”が、周囲の種たちにとっても自身にとっても、よいとは限らないから」

「——。——。——あ、そうよ！ “適切な『Off』の方向”がよいこともいろいろあるわ。

たとえば、“過剰な採取、過剰な生産、過剰な廃棄量、過剰な化石燃料消費量、過剰な酸素消費量、過剰な二酸化炭素放出量、過剰な人口、過剰なストレス、過剰な食べる量……”

——。それに——私の過剰な体重とかも？ アハハッ♪

“そうなのかい？”というような表情をしてみせた。

“そうなのよ”という表情＆うなずきが返ってきた。

「——もし本当に体重が増えすぎているのなら、体重が減ることが健康のために大事なものは確かだよ」

「——」

「もちろん、もし体重が減りすぎているのなら、体重が増えることが健康のために大事なのも確かだけれど」

「それはない。それはない。私、ダイエットしなきゃ——」

「——まあ、この体重の話は、生産量、人口、ストレス……の話とも本質的に同じで、いずれにしても、“量的な過剰さ”や“量的な過剰さ”があったり予想されたりすれば、それらの改善や予防が、自身にとっても、周囲の種たちにとっても、長い存続のために重要なものは確かだよ。

だから、例えば、“量 For 生態系”という発展が大事になるのさ。

ほかに、“質 For 生態系”という発展——“発達、成熟 For 生態系”も大事だし、“分布、タイミング For 生態系”という発展——“普及、間に合い For 生態系”も大事だよ。

つまり、“『For』の方向の発展”、発展“For 生態系”ならば、多いに達成されていいんだよ

「発展“For 生態系”——」

「そう。例えば、人類という種のみならず、植物、動物、菌類を含む、周囲の種たちが長く存続すべく、空気、水、土についての量、質、分布、タイミングをほどよく保つ知恵や技術——

例えば、生態系レベルのライフの一部として人類が調和し続けるために、自然エネルギーや燃料や食糧を含む、さまざまなエネルギー源についての量、質、分布、タイミングを、ほどよく保つ知恵や技術、あるいは、さまざまな人間社会レベルのライフ自身についての量、質、分布、タイミングを、ほどよく保つ知恵や工夫—— …

こういった発展“For 生態系”ならば、『Love - Love の関係』の構築につながっているから、なおさら歓迎される」

244

キラキラしている海辺に、海鳥たちが集っている——。

「周囲の種と『Love - Love の関係』を構築するために人類がすぐきただ1つのこと、“For 生態系”路線を育むこと——その実現のために人類に求められていることは、ほかにもある」と僕。

「それは、なあに？」と溜音。

「全人類を構成している、さまざまな人間社会レベルのライフどうしは、本来、もはや互いに争っている場合じゃないってこと——。つまり、多様な人間社会レベルのライフたちは、恵みやフルーツを与え合いながら健やかな全人類レベルのライフを誕生させていることが、“For 生態系”を十分に実現させるための前提として求められ

ているのさ」

「そのために、多様な人間社会レベルのライフたちどうしも『Love - Loveの関係』を構築することが求められているのね？」

「そうだとも。

この健やかな全人類レベルのライフは、人間社会レベルのライフの単なる寄り集まり以上の存在だよ。フラクタル的に相似な健やかな人間レベルのライフが、細胞社会レベルのライフの単なる寄り集まり以上の存在であるように——。

この全人類レベルの3ステップと、先ほど話した全ペーパー・コンパス類レベルの3ステップは、同じレベルだよ。(右図)

だから、健やかな全人類レベルのライフのフルーツフルさは、健やかな人間レベルのライフのフルーツフルさと相似であるだけでなく、健やかな全ペーパー・コンパス類レベルのライフのフルーツフルさと同等になりうる」

「はあー！」

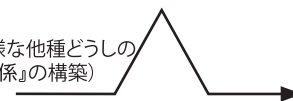
「この健やかな全人類レベルのライフは、話し言葉や書き言葉などを使った高度な情報伝達ができる人間社会レベルのライフたちが元だからこそ、誕生できるんだ。

かつて、DNAやRNAなどを使った高度な情報伝達ができる生体高分子社会レベルのライフたちが元だったからこそ、健やかな(真核)細胞レベルのライフが誕生できたように——。

あるいは、神経伝達物質やホルモンなどを使った高度な情報伝達ができる細胞社会レベルのライフたちが元だったからこそ、健やかな個体レベルのライフが誕生できたように——」

生態系レベル

(by全人類レベルのライフとしてのヒトという種と多様な他種どうしの恵みやフルーツの与え合い=『Love-Loveの関係』の構築)



全人類レベル

(by多様な人間社会レベルのライフどうしの恵みやフルーツの与え合い=『Love-Loveの関係』の構築

“言葉(音声言語、文字…)”
を利用する高度な情報伝達が前提)



個体社会レベル(≒人間社会レベル)

(by多様な個体レベルのライフ(≒人間レベルのライフ)どうしの恵みやフルーツの与え合い=『Love-Loveの関係』の構築

byときに“言葉(音声言語、文字…)”
を利用する高度な情報伝達)

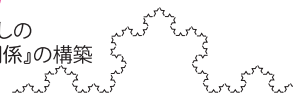
※個体社会レベルのライフ(≒人間社会レベルのライフ)
の単なる集合としての種はこのレベルどまり



個体レベル(≒人間レベル)

(by多様な細胞社会レベルのライフどうしの恵みやフルーツの与え合い=『Love-Loveの関係』の構築

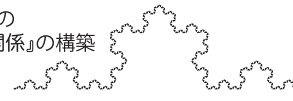
“神経伝達物質やホルモン…”
を利用する高度な情報伝達が前提)



細胞社会レベル

(by多様な細胞レベルのライフどうしの恵みやフルーツの与え合い=『Love-Loveの関係』の構築

by“神経伝達物質やホルモン…”
を利用する高度な情報伝達)



(真核)細胞レベル

(by多様な生体高分子社会レベルのライフどうしの恵みやフルーツの与え合い=『Love-Loveの関係』の構築
“RNA、DNA”を利用する高度な情報伝達が前提)

…

生体高分子社会レベル

(by多様な生体高分子レベルのライフどうしの恵みやフルーツの与え合い=『Love-Loveの関係』の構築
by“RNA、DNA”を利用する高度な情報伝達)

…

245

「それじゃあ、話し言葉や書き言葉などを使った高度な情報伝達ができない別の種たちにとって、健やかな全人類レベルと同じレベルのライフの誕生させることは難しいのね？」と溜音。

「そう。たとえ、アリやハチにとっても、チンパンジーやボノボにとっても、イルカやクジラにとっても…難しいのさ。

しかも、話し言葉や書き言葉などを使った高度な情報伝達ができる人間社会レベルのライフたちにとってさえも、健やかな全人類レベルのライフの誕生は可能性の話にすぎず、まだ実現していないことだよ。ただ、それでも——健やかな全人類レベルと同じレベルのライフの誕生は、すでに、この宇宙で実現しているはずだよ」

「——健やかな全ペーパー・コンパス類レベルのライフね？」

「そうさ。ペーパー・コンパス社会レベルのライフたちは、話し言葉や書き言葉などを使った高度な情報伝達によって、健やかな全ペーパー・コンパス類レベルのライフの誕生をすでに実現しているはずなのさ。そのおかげで、あれほど高度な科学技術を健全に利用できているはずだから」

「——アハッ♪ さすがよね」

「そうだね。だから、健やかな全人類レベルのライフの誕生は、決して夢物語ではなく、十分に実現可能なんだよ。

いや、単に実現可能なだけでなく、実現すべきなんだ——」

「この健やかな全人類レベルのライフの誕生が前提となつて、“For 生態系”を十分に実現できるからね？」

「その通りさ」

246

「——じゃあ、人類という種は、“For 生態系”を十分に実現するために、健やかな全人類レベルのライフとして、滅私奉公の精神で奉仕し続けなければいってこと？」と溜音。

「——ある意味、正しいけれど、ある意味、間違えているよ」と僕。「え？ どういうこと？」

「うん。正しいと言うのは——例えば、実際に植林を実施したり、実際に環境汚染を浄化したり、実際に環境への負担がより少ない産業やエネルギー源を育てたり、実際にリユースやりサイクルをしたり…を含めて、生態系レベルのライフのためになる活動を実現するために、健やかな全人類レベルのライフとして、時間やパワーの投資が不可欠になるからだよ。

別の見方をすれば——健やかな全人類レベルのライフは、生態系レベルのライフの『アタマ』の方向の存在、生態系レベルのライフの重要部分として活躍できるかもしれないってことなんだけどね」「生態系レベルのライフの重要部分——」

「そう。生態系レベルのライフの内外の全体像を常に把握して、危機を察知して回避したり、キズを保護して早い回復を促したり、さまざまなコンディションを調えたり…生態系レベルのライフをしっかり守って存続させるべく、より迅速に、より強力に、よりしなやかに対応できる立場のことさ。それこそ、人体の中の頭脳、脳神経系のように——。

だから人体における頭脳、脳神経系は、厳密には、さまざまな神経細胞社会レベルのライフが支え合って生まれている、健やかな頭

脳神経系レベルのライフと呼ぶうる、細胞社会レベルより高次レベルの存在、人間レベルより低次レベルの存在として、人間レベルのライフの『アタマ』の方向の重要部分を担っていたことになる——

「それと相似な存在が、人間社会レベルより高次レベル、生態系レベルのより低次レベルの健やかな全人類レベルのライフ——」

「そう、生態系レベルのライフの頭脳、脳神経系としての、健やかな全人類レベルのライフの具体的な対応には、例えば、気候変動の兆候や原因をモニターして早め早めに対処することで急激な気候変動を予防したり改善したりするとか、宇宙からの隕石の衝突の可能性を早めに察知して上手に対処するとか、公害や砂漠化が進んでいる地域をモニターして知恵や技術を出し合いながら健全な自然を取り戻すとか……によって生態系レベルのライフを守ることも含まれるよ。——だから、生態系レベルのライフの『アタマ』の方向の重要部分としての大きな貢献にもなって実際に時間やパワーを消費するという意味では、“滅私奉公の精神での奉仕”は正しいのさ」

「そうね」

「そして、間違えているというのは、何より健やかな全人類レベルのライフ自身が生態系レベルのライフの一部そのものだからなんだ。それこそ、健やかな頭脳神経系レベルのライフが人体の一部そのものであるように——」

「——」

「“一部そのもの”であることが何を意味しているか——」

「——何を意味しているの？」

「それは、生態系レベルのライフのためであることが同時に健やか

な全人類レベルのライフ自身のためでもあることを意味しているのさ。それこそ、人体のためであることが同時に健やかな頭脳神経系レベルのライフ自身のためでもあるように——。

つまり、生態系レベルのライフが健やかに生きるためにも健やかな全人類レベルのライフ自身が生きるためにも——それが“For 生態系”が本来意味する内容なんだよ。だから、自分自身のためでもあるという意味で“For 生態系”路線は“榮私奉公”であるから、“For 生態系”路線が“滅私奉公”であるというのは正しくないのさ」

「——ええ、そうね♪」

「さらに、“For 生態系”には、目先の将来のためにも長い将来のためにもという意味も含めることができる。このあたりのことは、生命何十億年もの歴史も教えてくれているんだよ」

「——え？」

247

「何十億年も前から今まで、地球上でライフが存続している。

音楽イン ♪ Birthtime

最初に誕生した多様な健やかな生体高分子レベルのライフは——自分自身のためにも生体高分子社会レベルのライフのためにもなるように、なおかつ、目先の将来のためにも長い将来のためにもなるように成熟していたおかげで、『Love - Love の関係』を構築できて、健やかな生体高分子社会レベルのライフの一部として、これまで長く存続できた。

つぎ たんじょう すこ たよう せいたいこうぶ ししゃかい
次に誕生した健やかな多様な生体高分子社会レベルのライフは——
じぶん じしん さいぼう
自分自身のためにも細胞レベルのライフのためにもなるように、
なおかつ、めきき しょうらい なが しょうらい
目先の将来のためにも長い将来のためにもなるように
せいじゅく
成熟していたおかげで、『Love - Love の関係』を構築できて、すこ
やかな細胞レベルのライフの一部として、これまで長く存続できた。

つぎ たんじょう すこ たよう さいぼう
次に誕生した健やかな多様な細胞レベルのライフは——
じぶん じしん さいぼうしゃかい
自分自身のためにも細胞社会レベルのライフのためにもなるよう
に、なおかつ、めきき しょうらい なが しょうらい
目先の将来のためにも長い将来のためにもなるように
せいじゅく
成熟していたおかげで、『Love - Love の関係』を構築できて、すこ
やかな細胞社会レベルのライフの一部として、これまで長く存続できた。

とく すこ しんけいさいぼうしゃかい
特に健やかな神経細胞社会レベルのライフは——
じぶん じしん ずのうしんけいけい
自分自身のためにも頭脳神経系レベルのライフのためにもなるよ
うに、なおかつ、めきき しょうらい なが しょうらい
目先の将来のためにも長い将来のためにもなるよ
うに成熟していたおかげで、『Love - Love の関係』を構築できて、
すこ ずのうしんけいけい いちぶ なが そん
健やかな頭脳神経系レベルのライフの一部として、これまで長く存
続できた。

つぎ たんじょう すこ たよう さいぼうしゃかい
次に誕生した健やかな多様な細胞社会レベルのライフ、すこ
ずのうしんけいけい
頭脳神経系レベルのライフは——
じぶん じしん こたい にんげん
自分自身のためにも個體レベルのライフ(≡人間レベルのライフ)
のためにもなるように、なおかつ、めきき しょうらい なが しょうらい
目先の将来のためにも長い将来
のためにもなるように成熟していたおかげで、『Love - Love の関
係』を構築できて、すこ こたい にんげん
健やかな個體レベルのライフ(≡人間レベルの
ライフ)の一部として、これまで長く存続できた。

つぎ たんじょう すこ たよう こたい にんげん
次に誕生した健やかな多様な個體レベルのライフ(≡人間レベル
のライフ)は——
じぶん じしん こたいしゃかい にんげんしゃかい
自分自身のためにも個體社会レベルのライフ(≡人間社会レベルの
ライフ)のためにもなるように、なおかつ、めきき しょうらい
目先の将来のためにもなるように成熟していたおかげで、『Love -
Love の関係』を構築できて、すこ こたいしゃかい
健やかな個體社会レベルのライフ(≡
人間社会レベルのライフ)の一部として、これまで長く存続できた。

とく すこ にんげんしゃかい
特に健やかな人間社会レベルのライフは——
じぶん じしん ぜんじんるい
自分自身のためにも全人類レベルのライフのためにもなるように、
なおかつ、めきき しょうらい なが しょうらい
目先の将来のためにも長い将来のためにもなるように成
熟していればこそ、そのおかげで『Love - Love の関係』を構築で
きて、すこ ぜんじんるい いちぶ なが
健やかな全人類レベルのライフの一部として、これからも長
く存続できる。

これまでたんじょう すこ たよう こたいしゃかい にん
げんしゃかい
誕生した健やかな多様な個體社会レベルのライフ(≡人
間社会レベルのライフ)や、これからたんじょう すこ ぜんじん
るい
誕生するだろう健やかな全人
類レベルのライフのライフは——
じぶん じしん せいたいけい
自分自身のためにも生態系レベルのライフのためにもなるように、
めきき しょうらい なが しょうらい
なおかつ、目先の将来のためにも長い将来のためにもなるように成
じゅく つづ
熟し続けていればこそ、そのおかげで」
「『Love - Love の関係』を構築できて、せいたいけい いち
生態系レベルのライフの一
ぶ部として、これからもなが そんぞく
長く存続できるのね！」かのじよ あか い
彼女が明るく言った。
「そうさ。だから、このように空間的にも時間的にも広く『For』
になるようにせいじゅく
成熟しているおかげで、すなわち——

“For 生体高分子”

“For 生体高分子社会”

“For 細胞”

“For 細胞社会”

“For 頭脳神経系”

“For 個体”

“For 人間”

“For 個体社会”

“For 人間社会”

“For 全人類”

“For 生態系”

“For 短い将来のライフ”

“For 長い将来のライフ”

…

を含む For『In』 & For『Out』へと成熟しているおかげで——

つまり、For All Life へと成熟しているおかげで—— 『Love-

Love の関係』を構築しながら、これまで、みんな健やかに長く存続

できていたし、これから、みんな健やかに長く存続できるんだ」

「For All Life —— それは、何十億年ものライフの歴史が教えて

くれる、とびっきりの知恵なのね！」

「そうさ。この For All Life の知恵には、ライフにおける、あらゆる

問題を根底から解消する可能性もある。

だから、For All Life の知恵こそが、究極の意味であり、ライフ

のパズルを解く究極のカギなんだよ。きっと」

「へえ、すごい」

「For All Life の知恵の実践、For『In』 & For『Out』の知恵の実践
の典型的な例が、植物がフルーツを提供することだよ。

フルーツの中の種が For『In』、フルーツの中の果皮が For『Out』
だから」

「へえー♪ フルーツは、For All Life の知恵の実践の象徴なのね♪」

「そうさ。しかも、フルーツは、究極の意味の象徴でもあり、ライ
フのパズルを解く究極のカギの象徴でもあるよ♪」

「すごーい♪」

For All Life ——

それは、何十億年もの

ライフの歴史が教えてくれる

とびっきりの知恵

248

海^{うみ}辺^べのキラキラが輝^{かがや}きを増^ましている——。

「For All Life —— すてきね。

この For All Life のおかげで、『Love - Love の^{かんけい}関係』を^{こうちく}構築^{くわ}でき^るるんですもの」と^る瑠音^ね。

「そうだね。地球^{ちきゅう}上の何^{なんじゅうおくねん}十億^{れきし}年の歴史^しを持つ^じライフ^{しめ}自身^{しめ}が示^ししている方向^{ほうこう}だから、な^おおさら——」と^{ぼく}僕^{ぼく}。

「そうね。もしかしたら^{いせいじん}異星人^いだったか^{いっ}もしれない^かコンパス^{いっ}一家^かが示^ししている方向^{ほうこう}でもあるから、さら^に、な^おおさら—— アハッ♪」

「アハハッ。そうだね。

まあ、それは^{すこ}健^{ぜん}やかな^る全^いペーパー・コンパス^る類^いレベル^いのライフ^いの^{しゅっしん}出身^{ちきゅう}が地球^{ちきゅう}であってもなくても、い^おずれにしても^お同じ^おだよ。

それでも、この For All Life の知^ち恵^えは、人^{じん}類^{るい}が、将^{しやう}来^{らい}、健^{すこ}やかな^{すこ}全^{ぜん}人^{じん}類^{るい}レベル^いのライフ^いを^{たんじやう}誕生^{たんじやう}させ、天^{てん}体^{たい}生^{せい}態^{たい}系^{けい}社会^{しやかい}レベル^いの一^{いち}員^{いん}となりながら^う宇宙^{しんそふ}に進^{しん}出^{しゅつ}する際^{さい}にも^{ひつ}必須^すになるほど^ふ普^{へん}遍^{てん}的^{てき}で^{たい}大切^{せつ}である^{たし}のは^{たし}確^{たし}かだよ。その^い意味^みで、For All Life の知^ち恵^えは、未^み来^{らい}が^お教^おえて^おくれる^お知^ち恵^えである^いと言^いえる^いか^いもしれない——」

「すてき♪」

「For All Life の知^ち恵^え——『In』と『Out』の^{りやうほう}両^ち方^ちのため^ちに^ちという^ち知^ち恵^えの^{じっせんれい}実践^{げんざい}例^{にんげんしやかい}は、現^み在^みの^み人^み間^み社会^みにおいて、い^ろろい^ろろ^ろ認^めら^れるよ。

例^{たと}え^えば、交^{こう}通^{つう}ル^るール^るを守^{まも}ることが、自^じ分^{ぶん}自^じ身^{しん}と相^あ手^ての^あ両^{りやうほう}方^{まも}を守^{まも}る^{まも}た^{まも}めに^{まも}役^{やく}立^だつ^だとか——^て手^て洗^{あら}いや^{ちやく}マ^{ちやく}スク^うの^{ふく}着^{えい}用^{せい}を^{かん}含^{らん}む^{かん}衛^{かん}生^{かん}管^{かん}理^りが、^{じぶん}自^{じぶん}身^{しん}と周^{しゅう}圍^いの^{りやうほう}両^{かん}方^{せん}の^よ感^{かん}染^{せん}予^よ防^{ぼう}につ^{らん}なが^{らん}ると^{かん}か——^{らん}乱^{らん}獲^{かく}し^{ない}ない^いこ^いを^{ふく}含^{ふく}めて^{ふく}食^{しよく}糧^{りやう}資^し源^{げん}を^{だい}大^{だい}事^じに^{まも}守^{まも}ることが、自^じ国^{こく}と他^た国^{こく}の^{りやうほう}両^{りやうほう}方^{りやうほう}、あ

る^いは、人^{じん}類^{るい}と他^た種^{しゆ}の^{りやうほう}両^{りやうほう}方^{りやうほう}、あ^める^めいは、目^め先^{さき}と遠^{とお}い^{しやうらい}将^{しやうらい}来^{りやうほう}の^{りやうほう}両^{りやうほう}方^{りやうほう}の^{りやうほう}た^{りやうほう}め^{りやうほう}にな^{りやうほう}ると^{りやうほう}か—— …

つまり、^{すこ}健^{すこ}やかな^{しやかい}社会^{しやかい}において^{すこ}ル^{すこ}ール^{すこ}や^{すこ}約^{やく}束^{そく}や^{すこ}エ^{すこ}チ^{すこ}ケ^{すこ}ット^{すこ}を^{すこ}守^{まも}る^{まも}こ^{まも}とは、た^いいて^い、『In』と『Out』の^{りやうほう}両^{りやうほう}方^{りやうほう}の^{りやうほう}た^{りやうほう}め^{りやうほう}にな^{りやうほう}っているよ」
「^{たし}確^{たし}かに、^{たし}そ^{たし}う^{たし}よ^{たし}ね♪」

249

しばらくの間、^{あいだ}水^{すい}平^{へい}線^{せん}の^{ほう}方^{ほう}の^なぼ^なん^なや^なり^な眺^{なが}め^{なが}続^{つづ}けて^{つづ}いた^{つづ}瑠^る音^ねが^る口^{くち}を^る開^あいた。「^おそう^おす^おると——^お わ^おた^おし^おた^おち^おは、^おみ^おん^おな^おが^おみ^おん^おな、^お決^きま^きり^きき^きつ^きた^き同^おじ^おこ^おと^おを^おし^おな^おけ^おれ^おば^おら^おな^おい^おつ^おて^おこ^おに^おなる^おの^おか^おな^おあ。

だ^おと^おし^おた^おら——」

「——だ^おと^おし^おた^おら？」と^{ぼく}僕^{ぼく}。

「^{きゆうくつ}窮^あ屈^あと^あい^あう^あか、^あ味^あ気^あな^あい^あと^あい^あう^あか、^あつ^あま^あら^あな^あい^あと^あい^あう^あか……」^あ明^あら^あか^あに^あ彼^{かの}女^{じよ}は、^あし^あず^あん^あで^あいた。

「もし、^おみ^おん^おな^おが^おみ^おん^おな、^お本^{ほん}当^{とう}に、^お決^きま^きり^きき^きつ^きた^き同^おじ^おこ^おと^おを^おし^おな^おけ^おれ^おば^おら^おな^おい^おつ^おて^おこ^おに^おなる^おの^おか^おな^おあ。

でも、^おこ^おこ^おに^おあ^おる^おの^おは、^おち^およ^おつ^おと^お違^{ちが}う^{ちが}ん^{ちが}だよ」

「^おど^おん^おな^おふ^おう^おに^お違^{ちが}う^{ちが}の？」

「^おま^おず、^お基^き本^{ほん}的^{てき}には、^おそ^おれ^おぞ^おれ^おが、^お心^{しん}底^{そこ}や^おり^おた^おく^おて^お自^じ分^{ぶん}自^じ身^{しん}を^お喜^{よろこ}ば^よせる^よこ^よと^よを^よ自^じ由^{じゆう}に^よ選^えら^えん^えで、^よ好^すき^すな^すよ^すう^すに^すや^すつ^すて^すい^すい^すん^すだよ。

しかし、^おそ^おの^お自^じ由^{じゆう}に^お選^えら^えん^えだ^えこ^えと^えは、^お単^{たん}に^お自^じ分^{ぶん}自^じ身^{しん}を^お喜^{よろこ}ば^よせる^よだ^よけ^よで^よあ^よれ^よば、^よタ^たイ^たミ^たン^たギ^たン^たグ^たや^た状^{じゆう}況^{きゆう}……^よに^よよ^よつ^よて^よは^よ周^{しゅう}圍^いの^{しゅう}み^{しゅう}ん^いな^いを^か悲^{かな}し^{かな}ませ

たり困らせたりしうる。その場合、もし、無配慮や無思慮のままに
つづけたなら、最終的に、自分自身が、非難されたり、罰せられたり、
傷ついたり、病んだり…結局、自分自身も、つらくなる。

でも、もし、その自由に選んだことを、タイミングや状況を見計らっ
て、配慮や思慮を加えることによって、自分自身だけでなく周
囲のみんなも喜ぶことへと洗練させたり成熟させたりできれば——
最終的に、自分自身と周囲のみんなが、安心だったり、健やかだっ
たり、満足だったり、幸せだったり…を含めて、結局、自分自身も
周囲のみんなも両方が、うれしいことになる。

つまり、For All Life の知恵——『In』と『Out』の両方のために
という知恵の実践例として、個人の健やかな自己実現も挙げられる
のさ。この健やかな自己実現とは、フルーツのように For『In』&
For『Out』の存在になること、いわば自己フルーツ化だよ。

だから、ここにあるのは、“みんな決まりきった同じことをしな
ければならない”といった窮屈でつまらない制限というより——
このような成熟 For『In』& For『Out』、成熟 For All Life を実現
できれば、お互いに、喜びを保てたり、喜びを増やせたりできるよっ
ていう、のびやかな、おいしい知恵なんだよ。フルーツのように、
おいしい知恵——

「よかった♪ For All Life の知恵は、のびのびしていて、フルー
ツのように、おいしいのね♪」

「そう。しかも、成熟 For All Life という条件を満たせば、多様な
自己実現、多様な“ライフのあり方”が保証されていることは、生態
系レベルのライフを構成する多様な種が教えてくれることでもある」

「え？」

250

「フルーツを提供する多様な植物種を含めて、生態系レベルのライ
フを構成する種がこんなに多様性にあふれていることは、成熟 For
All Life の実現と、“ライフのあり方”の限りない多様性の実現、限
りない多様な自己実現が両立することを保証しているのさ。

成熟 For All Life を実現している生物種が、こんなに多様性にあ
ふれながら生態系レベルのライフを構成しているように、成熟 For
All Life を実現している人生も、健全な自己実現、自己フルーツ化
を果たしている人生も、多様性にあふれながら人間社会レベルのラ
イフを構成できるのさ。フラクタル的に相似だから——」と僕。

「——よかったあ♪」と溜音。「そうすると、成熟 For All Life の
おかげの『Love - Love の関係』の構築と、人生が限りなく多様で
あることも、両立できるのね？」

「その通り。成熟 For All Life によって『Love - Love の関係』を
構築しながら、人生、人間レベルのライフは、いくらでも多様性
にあふれられる。種、個体社会レベルのライフが、いくらでも多様性
にあふれられるように——。

しかも、このように、いくらでも多様性にあふれられるのは、生
態系レベルのライフ、人間社会レベルのライフ、細胞社会レベルの
ライフ…そして、未来の健やかな全人類レベルのライフも同じさ」
「相似だからね？」

「そう。その通りだよ！」

251

「ねえ、高校時代の、7つのワクワク枠が、いろんな“ライフのあり方”を教えてくださいのさって話、覚えている？」と溜音。

「ああ、覚えているよ」と僕。

「あの日、私たちが挙げた“ライフのあり方”が結局すべて『For』ライフの例になっていることに気づいたけれど、あの日の『For』ライフと今日の“成熟 For All Life”は、似てるけれど意味は違うよね。——これらの2つは、全く無関係かしら？」

「いや、大いに関係あると思うよ。」

なぜって、1つは、僕らが高校時代に挙げた、いろんな『For』ライフも、成熟 For All Life を実現できてはじめて本物になるから。

もし、成熟 For All Life を実現できないまま、“生態系レベルのライフ、人間社会レベルのライフ、細胞社会レベルのライフ…”を害し続けていれば、長い目で見て、しっぺ返されて、喜び、楽しみ、快適さ…にあふれた『For』ライフを失うのだから当然だよな

「あ、そっか——。それもそうよね」

「それから、もう1つの理由は、『For』ライフが、成熟 For All Life の実現につながりやすいから。

例えば、“今、心地よくてハッピー”であれば、それだけストレスも少なくリラックスできているってことで、“頭と体の健康”や“心の健康”につながりやすい。それは、“人間レベルのライフのため”になりやすいのはもとより、“細胞社会レベルのライフのため”にもなりやすい。

それに“今、心地よくてハッピー”なら、それだけ“自分自身も、

周囲の誰かも生きるため”に活躍しやすい。それは結局、“人間社会レベルのライフのため”につながりやすいってことでもある」

「アハッ♪ そうね。——すると、同じ理由で、『For』ライフは、“生態系レベルのライフのため、未来の健やかな全人類レベルのライフのため、長い将来のため”にもつながりやすくなるのね？」

「そうさ。まず自分自身が『For』ライフを営めれば、心身がイキイキ、ウキウキ、ワクワクし、さまざまなライフ——人間レベルのライフ、人間社会レベルのライフ、生態系レベルのライフ…そして、未来の健やかな全人類レベルのライフのために活躍しやすくなる。つまり、このように『For』ライフが成熟 For All Life の実現につながりやすいことも『For』ライフと For All Life を大いに関連させている」

「ええ、そうね♪」

252

相変わらず、同じペースで繰り返される波——。

ザブーン、ザザザシュー…

「ねえ、そうすると、逆に『Against』ライフに陥ってしまったら、成熟 For All Life の実現も危うくなるのかしら？」と溜音。

「うーん——」・・・「それは、結局—— そのあと、どんな方向を目指すか次第、つまり、その後の選択次第じゃないかなあ」と僕。

「選択？」

「そう。そりゃあ、『For』ライフに比べれば、『Against』ライフの方が、リスクが大きいと思うよ。

だって、例えば、悲しみやつらさ…をためこんで長くくすぶらせ続けてしまえば、ストレスが蓄積して健康を害してしまったり、“何か”や“誰か”を傷つけることにつながってしまったり…未熟な Against Life モードをとりやすいのは確かだろうから。

でも、でもだよ——。たとえ、悲しみやつらさ…に遭遇したとしても、上手に対処して、心底さっぱりした上で、次の目標、楽しみ、ワクワク…を育むように方向転換する“ライフのあり方”を選択するならば、未熟な Against Life モードを外れ、成熟 For All Life を実現できるんだよ。

この“ライフのあり方”の選択は、まさに、“人間レベルの3ステップと『アタマ』の方向”の所産である“～しよう”の意志や“～するのがよい”の知恵が関わっていることだよ。

この知恵には、悲しみやつらさ…からくる、モンモン、ウツウツ、クヨクヨ…を含むストレス反応自体が細胞社会レベルの3ステップの所産にすぎず、呼吸法などでコントロールできるとい認識も含まれているはずだよ」

「——ええ、そうね♪」

音楽 ♪ Reconstruction 253 に続く

253

「それに、成熟 For All Life を実現するために、やむなく甘受すべき“一時的な『Against』ライフ”も、きっとあるはずだよ。

例えば——

おじいちゃんが本気で怒りながら“人生はこれからなんじゃ”と励ましてくれたときの心の痛み

休養の大切さを教えてくれた、スランプのときの苦しさ

ペース配分の大切さを教えてくれた、急な坂を上る際のしんどさ

コンパルンクルに“思いやりの心”や“楽しみにする心”の大切さを教えてあげることとなった、試験期間中の君に会うのを我慢させるつらさ…とか？」と僕。

「フフッ♪ そうよね。

こういった一時的な『Against』ライフたちには、どれも成熟 For All Life を実現するまでの起点や転機、試練の意味があるのね。

ほかにも——

子どもがあるかたみに身につける頃の、転倒の際の痛み

健康のために乗り越える、採血や点滴などの際の針の痛み

元気な赤ちゃんを生むために乗り越えるつわりのつらさ…も同じで」と溜音。

「そうさ。だから——痛み、つらさ、しんどさ…は、なくてすむなら、それに越したことはないけれど、これらを甘受する一時的な『Against』ライフは、ときに、成熟 For All Life を実現するまでの貴重なプロセスになりうるのさ」

「プロセス——」

「そう。それは確かに“プロセスなりうる”ということにすぎず、ときに、こういった一時的な『Against』ライフが、心の傷をもたらし続けたり、さらなる悲劇の原因になったりすることもありうる。

そうなるかならないかの分岐点は何かといえ——

“ある『Against』ライフを経験した際に、成熟 For All Life 志向を貫けるかどうか”なんだよ

「——ええ、そうね。 ——。 ——あ、そうだ！

そういう意味でも、可能な限り、イヤな連鎖を断つこと——

“『Against』の連鎖を断ち切ること”は大切になるよね？」

「え？——」・・・「——もしかして、あのこと？」

「そう。

——ちよっぴり見直したでしょ？ アハハッ♪」

すぐく見直した。

可能な限り、『Against』を連鎖させないこと——

彼女が、かつて、クラスメートに向けて取っていた、あの態度が、これほど、すてきだったとは——。

音楽フェード・アウト ♪ Reconstruction

254

さらに輝きを増している海辺のキラキラ——。

しばらくすると、瑠音が口を開いた。

「確かに、“『Against』を連鎖させないこと”は、単なる理想にすぎないかもしれないし—— ときに、心の痛みを抱え続けざるをえなかったり、ときに、はっきりとした主張のせいで議論が終わらなくなったり、ときに、イライラが判断ミスを引き起こしたり…もありうるよ。『Against』ライフを、一時的なプロセスに、なかなかできないうせいで——。

音楽イン ♪ Love

でも、もし、みんなが最初から、少しずつでも、そういう“優しさ”とか“ゆるす気持ち”とかを持ち寄って、『Against』を連鎖させないように、プチ『Against』のうちにイヤな連鎖を断ち切る努力をしていたら—— きつと—— 何ていうか、——いいよね？」

「そうだね。

『Against』を連鎖させないためには、はじめから、逆の『For』を連鎖させ続けていること、“優しさ”や“ゆるす気持ち”などの『For』を与え続けていることが、一番効果的なんだろうね」

・・・ 「——あ！」僕は、思わず声を上げた。

「え？ どうしたの？」

「ゆるすって、“forgive”じゃん。この“forgive”には、“与えるために”の意味だけでなく、“『For』を与える”の意味もありそうだよ」

「アハッ♪ おもしろーい♪ 確かに、そうらしいわよね」

「だろだろ？」

音楽 ♪ Love 255 へ続く

255

「ときには、あっさりゆるす方が、お互い早くすっきりする場合があるわよね？ もちろん、ときには、安易にゆるしていけない場合もあるけど——」と溜音。

「ああ、そうだね」と僕。

「——あ、そういえば、『ゆるすのは自分のためでもある』という言葉の前に本で読んだわ。そうすると、『For』を相手だけでなく自分自身にも与えることが“ゆるす forgive”だったのね。

——。 ——あ！」

「あ！」僕らは、ほとんど同時に、“あ！”を発した。

「忘れるが“forget”だと気づいたんでしょ？」と彼女。

「そうだよ。“forget”には、きつと“『For』を得る”って意味もあるよ。“得るために”だけでなく——。だから、相手や自分が『For』をゲットすることが、“忘れる forget”だったんだよ」

「そうね。ときには、あっさり忘れる方が、お互い早くすっきりする場合があるわ。もちろん、ときには、決して忘れていけない場合もあるけど——。確かに『忘れるのは相手のためでもある』って言葉も、どこかで聞いたことがある——」

「そうすると—— “ゆるす forgive”と“忘れる forget”は、両方も、結局、自分や相手に『For』を提供することにつながっているという意味で、同じじゃん」

「おもしろい♪ それに、そもそも“忘れる”には“ゆるす”の意味があるようだわ。——そうよ。“忘れる forget”と“ゆるす forgive”は、本来切っても切れない関係にあるのよ。だから、“忘れながら、ゆ

るす”、“ゆるしながら忘れる”が本来ふつうなのよ」

「なるほど」

音楽 ♪ Love 256 へ続く

256

「もしかしたら、“忘れながら、ゆるす”、“forgetしながら forgiveする”は—— “『For』を得ながら『For』を与える”という、より一般的な知恵の1例なのかもね？」と僕。

「——。 ——ええ、きつと、そうよ！」

たとえば——

自分が喜びながら誰かを喜ばせる。

自分が楽しみながら誰かを楽しませる。

すてきな思い出を作りながら、すてきな思い出を作らせてあげる。

いつか実現したい夢や目標を見つけながら、いつか実現したい夢や目標を見つけさせてあげる。

...

どれも同じなんだわ」と溜音。

「そうだね。どれも、“忘れながら、ゆるす”、“忘れながら忘れさせてあげる”と本質的に同じで、『For』を得ながら『For』を与えていることになっているんだね」

「そうよ。」

それに、このような自分自身のためになりながら相手のためになっ

ているという一般的な知恵は、まさに、For All Life 志向にも適っているわ♪」

音楽フェード・アウト ♪ Love

「そうだね。自分のためにも、相手のためにも、つまり、For『In』& For『Out』志向という意味の For All Life 志向——」

「そうよ」

「つまり——」

例えば、忘れながら忘れさせたり、楽しみながら楽しませたり、喜びながら喜ばせたり…によって、『For』を得ながら『For』を与えること、自分と相手の両方のためになることが可能であり——

そのために『For』こそを与え続けければ、『Against』の連鎖を断ち切りながら For All Life 志向を貫くことができる—— そのような深い考えが、かつて君がクラスメートに向けて取っていた、あの態度の奥にあったんだね」

「ええ、そうなのよ。」

——って、そんなわけないでしょ？ フフッ♪」 はにかむ彼女。

257

ザブーン、ザザザザシュー …

海辺のキラキラがさらにさらに増している——。

「そうすると—— 自分自身の『For』ライフのおかげで成熟 For All Life が実現しやすくなる一方で、たとえ『Against』ライフに

陥ってしまったとしても、上手に対応することで、For All Life 志向を貫けるのね？」と瑠音。

「そうさ。しかも、たとえ『For』ライフであっても、あくまで For All Life 志向を貫き続けることが重要になるよ。なぜって、『For』ライフが成熟 For All Life を実現しやすいのも、あくまで単に“実現しやすい”ってだけの話で、たとえ『For』ライフであっても、下手すりゃ、未熟な Against Life モードに至ってしまうのだから——」と僕。

「——ええ。言われてみれば、確かにそうよね。」

今の自分の楽しみが、将来の自分を困らせてしまったり、目の前の喜びが周囲の迷惑になってしまったり…もありうるもんね」

「そう。その通り。」

それで、一方、次のようなことも言える。

“自分自身の For All Life 志向が高まれば、そのおかげで周囲も For All Life 志向を高めやすくなって、周囲の For All Life 志向が高まれば、そのおかげで自分自身も For All Life 志向を高めやすくなる——” そんなことも」

「そうね。やっぱり、『For』の連鎖というか、『For』のりレーと
いうか——。 ——」

258

「——アハッ♪ 最初は周囲の一部の人たちから恵みを受け取っていた赤ちゃんが、成長することで周囲のみんなに恵みを与えられる

よくなることを思い出せば、

誰かから恵みやフルーツを受けて

→その誰かや自分自身を含むみんなに恵みやフルーツを与えて

誰かから恩や愛を受けて

→その誰かや自分自身を含むみんなに恩や愛を与えて

誰かのおかげで生きて

→その誰かや自分自身を含むみんなのために生きて

…

のような『For』の増幅や拡散もあるのかもね。単なる『For』の連鎖やリレー、お返し…だけでなく——」と瑠音。

「——」・・・「——なるほど。きっとそうだよ！」

だからこそ、人類がここまで繁栄できたわけだし——。

なぜなら、仮に、みんながみんな身内の中だけで、本当に“単なるお返し”や“単なる恩のリレー”だけをしていたなら、農業や工業、科学技術や医療…の広まりという形の『For』の増幅や拡散もなく、人類は、ここまで繁栄できていなかったはずだから」と僕。

「——フッ♪ そうね。

例えば、今のどこの小学校の先生は、かつて小学生だったときに、当時の担任の先生から恩や愛を受けて、今は、その恩や愛を何十倍、何百倍にも増やして多く子どもたちに与えている—— このことにも『For』の増幅や拡散があてはまるわ。

もちろん、これと似ている『For』の増幅や拡散は、教師以外にも、医師、歌手や作家、農家や漁師、学者やスポーツ選手、会社員や公務員、自営業者や経営者…の方々にも、きっと、あてはまるはずよ」

「アハッ。そうだね。

そういう、いわば“恩増幅社会”や“恩拡散社会”こそが、きっと、“そうあるべき&そうありたい”本来の社会の姿なんだよ。“単なるお返し社会”や“単なる恩リレー社会”ではなくて——」

「そうね♪」

259

「——それに、もし『For』の増幅が全くなければ、そもそも、成熟 For All Life が全く成り立たないようでもあるよ。

なぜって、単に“自分と相手の両方を喜ばせる”だけでも、その時点で、単なるお返しや単なる恩リレーを超えた増幅が起きていることになるのだから。今さっき初めて気づいたけれど——」と僕。

「アハッ♪ 私も♪

そう言えば、お姉ちゃんも話していたよ。子どもが元気で、ときに笑顔がこぼれるだけで、十分うれしくて満足なんだって——。

それは、お母さんも同じっぼい——。いろいろ口うるさいときもあるけど、基本的には、娘である私たちが元気で幸せでいてくれるだけで十分という感じで——」心笑みながらの瑠音。「親たちへの恩返しよりも、まず、自分自身や次の世代に喜びや愛情をプレゼントしてあげてほしい。それだけでも十分恩返しになっているだけでなく、そもそも、こっちは恩を与えた時点で十分に喜びを得ているのだから、みたいなの？」

「私も、将来、そう思えたらいいな——」

「それが、本来の“無償の愛”なのかもね。たとえ、外から無償に見えても、実際は、心の中で、ちゃっかり、ほぼ有償に匹敵するほどの報酬を受け取っていて——。

——“無償の愛”の正体、見破ったり！ みたいなの？」

「フフフッ。そうよね。

——私、自作の詩や歌、あなたに喜んでもらうだけで、十分満足だったわ。これも、似たようなものかもね？

“無償の愛”というほど大げさじゃないけれど——」

「そうそう、わかるわかる。僕も、写真、君に喜んでもらうだけで、十分うれしい気持ちになっていたよ。これも、きっと同じだね。

アハッ」 僕らは、部分的には似た者どうしでもあった？

「フフッ♪ そうね。

この気持ちは、本来、私たちや親だけでなく、教師や医師、歌手や作家、農家や漁師、学者やスポーツ選手、会社員や公務員、自営業者や経営者…の方々も、きっと同じはずよ。

——だから、本来、単なる恩返しや、単なる恩リレーにとどまる必要なんて、さらさらないのよ」

「恩増幅や恩拡散も、ありなんだね？」

「——ありどころじゃないわ。だって、恩や恵みやフルーツや愛は、何十倍にも何百倍にも増幅できて、自分自身を含む多くの人へ広く届けることができるんですもの♪」

「そうだね。そのおかげで成熟 For All Life の実現も、健やかな自己実現——自己フルーツ化や自分らしいフルーツの現出も限りなくできそうだし——。

それに、例えばフルーツを提供してくれる植物も、フルーツを何十倍にも何百倍にも増幅させて広めているくらいだから、『For』の増幅や拡散は、決して、摩訶不思議なことでもで深遠なことでも特殊なことでもなく、自然で身近なことなんだね」

「ええ、そうね♪」

おん めぐ
恩や恵みやフルーツや愛は

なんじゅうばい なんびゃくばい ぞうふく
何十倍にも何百倍にも増幅できて

じぶんじしん ふく おお ひと
自分自身を含む多くの人へ

ひろ とど
広く届けることができる

260

「この“いくらでも増幅させたり、拡散させたりできる恩や恵みやフルーツや愛”の中に、さまざまな知恵、技術、工夫…も含まれていることを思い出せば——人類がここまで豊かに発展できたのも、単なる恩返しや恩リレーで終わらなかったおかげであると、より納得できる」と僕。

「そうね。下手に単なる恩返しや単なる恩リレーで終わってしまうことは、単に個人にとってもつたいないだけじゃなく、社会全体や人類全体にとっても大きな損失なんだわ。大きな可能性やチャンスが失われてしまうことになるのだから——」と溜音。

「そうだね。単なる恩返しや単なる恩リレーで終わらないことは、きっと、多様な人間社会レベルのライフが、成熟 For All Life を実現して『Love - Love の関係』を構築することによって健やかな全人類レベルのライフを誕生させるためにも必要なことだよ。それは、多様な人間社会レベルのライフが、それぞれの恩や恵みやフルーツや愛を、お互いに増幅、拡散させ合ってこそ実現すると思う」

「——そうね」

「それに、単なる恩返しや単なる恩リレーで終わらないことは、きっと、人類を含む多様な種が成熟 For All Life を実現して『Love - Love の関係』を構築しながら生態系レベルのライフとして長く存続するためにも必要なことだよ。

それが実現できるのは、まさに、人類を含む多様な種がもたらす、恩や恵みやフルーツや愛の増幅や拡散があつてこそだと思う」

「——ウン。 ——。 ——え？」

261

海辺のキラキラがピークに達している——。

音楽イン ♪いつかここへ Someday Here

「この生態系レベルのライフが長く存続するためには、例えば、生態系レベルのライフからたっぶり“恩や恵みやフルーツや愛”を受けとりながらスクスク成長してこれまで存続してきた人類という種も、何らかの“恩や恵みやフルーツや愛”を増幅、拡散させて生態系レベルのライフに与え続けるべきだつてことさ。例えば、果樹という植物が、何十倍、何百倍と増幅させながらフルーツを提供し続けているように——。

しかも、特に人類という種には、何千倍、何万倍、何億倍…という桁外れの“恩や恵みやフルーツや愛”を提供できる可能性もあると思うよ」と僕。

「え？ どういうこと？」と溜音。

「健やかな全人類レベルのライフを誕生させた上で、前に話した、生態系レベルのライフの『アタマ』の方向の存在——“生態系レベルのライフの頭脳、脳神経系”として積極的に活躍することが、桁外れの“恩や恵みやフルーツや愛”の提供に相当しうってことさ。例えば、隕石落下を予防するとか、急激な気候変動を予防したり改善したりするとか、公害や砂漠化を含む生態系レベルのライフのケガや病気を治療するとかなんて、まさにそうだと思うよ」

「あつ、なるほど——」

音楽イン ♪いつかここへ Someday Here262 に続く

262

「——ねえ。その生態系レベルのライフの『アタマ』の方向の存在として提供できる桁外れの“恩や恵みやフルーツや愛”には、ほかに何があるかしら？

例えば、その中には、よりよい空気、よりよい水、よりよい土壌……つまり、よりよい環境が含まれるのは確かだろうけど」と溜音。

「その“よりよい環境”には、よりよい気温はもちろん、よりよい太陽光、よりよい風、よりよい雲…を含む、よりよいエネルギー循環はもちろん、それらをもたらしてくれる、よりよいアイデアとか、よりよい技術の開発とか、エネルギー循環についてのよりよい理解とかも、桁外れの“恩や恵みやフルーツや愛”に含まれると思うよ。

さらには、生態系レベルのライフのために働いてくれる、植物や動物などの営みを守ったり、積極的に支援したりすることも、桁外れの“恩や恵みやフルーツや愛”に含まれるはずさ。例えば、植林を進めたり、砂漠を緑地化したり…って、これらは結局“よりよい環境”であるだけでなく、“生態系レベルのライフの治療”でもあるんだけどね。アハッ」と僕。

「フッフ、そうね。そうすると、これらの“よりよい環境作り”や“生態系レベルのライフの治療”をより実現しやすくするような社会的なしくみ——よりよい“大学などの研究システム”はもちろん、よりよい“経済活動や行政、法律…”、それらを支えるような“一人ひとりのよりよい消費行動や投票行為”なども、間接的だけれど、きっと桁外れの“恩や恵みやフルーツや愛”に含まれるはずだわ。

「そうだね。

さらには、そういった生態系レベルのライフにも優しい人間社会レベルのライフを誕生させる一人ひとりの人間レベルのライフスタイルを支えるような、よりよい知恵も桁外れの“恩や恵みやフルーツや愛”に含まれているはずだよ」

「それは、よりよい知恵を広めたり、実践したり…を根底で支えてくださる方々の貢献も、桁外れの“恩や恵みやフルーツや愛”に含まれるってことよね♪」

音楽イン ♪いつかここへ Someday Here 263 に続く

263

「これらの多くは、人間社会レベルのライフの『アタマ』の方向の存在がもたらす桁外れの“恩や恵みやフルーツや愛”だね」と僕。

「そうね。人間社会レベルのライフの『アタマ』の方向の存在がもたらす、生態系レベルのライフの『アタマ』の方向の存在としての桁外れの“恩や恵みやフルーツや愛”だから、まさに“重要部分中の重要部分”がもたらす“恩や恵みやフルーツや愛”だわ」と溜音。

「——あ！人間社会レベルのライフの間で『Love - Love の関係』が構築されて健やかな全人類レベルのライフが誕生していれば、その健やかな全人類レベルのライフの『アタマ』の方向の人間社会レベルのライフの『アタマ』の方向の存在がもたらす、生態系レベルのライフの『アタマ』の方向の存在としての桁外れの“恩や恵みや

フルーツや愛”になる」

「えー! ?

——^{すこ}健やかな^{ぜんじんるい}全人類レベルの^{たんじょう}ライフが誕生して^あいば、ここに^あある“^{おん めぐ}恩や^あ恵みや^あフルーツや愛”は、“^{じゅうよう ぶぶんちゅう}重要部分中の^{じゅうよう ぶぶんちゅう}重要部分中の^{じゅうよう ぶぶんちゅう}重要部分”^あがもたらす“^{おん めぐ}恩や^あ恵みや^あフルーツや愛”だって^あいうこと?」

「そういうことになるね」

「すごい♪」

それは、すこぶるフルーツフルなデートだった。

音楽終了 ♪いつかここへ Someday Here

264

そして、^{だいがく ねん しょ か}大学3年の初夏——

音楽イン ♪夏 Summer

^{る ね ぼく}溜音と僕は、^{きせい おり}ふたりして^{せい か}帰省した折に、^{せい か}それらの成果をおじいさん^{つた}に伝えるべく、^{いっしょ みさき む}一緒に岬へと向かった。

ここらあたりに、“^{きうきよく い み こた}究極の意味”の^{こた}答えがあるだろう。

そのように^{み こ}見込みながら——。

けれど、岬に着いてみると、そこに、おじいさんの^{すがた}姿はなく、^{て がみ}手紙が^お置いてあるだけだった。その^{て がみ}手紙には、おじいさんは^{いま げん き}今も元気で、^{あ い か こうかい ちゅう}相変わらず航海には^かまり中であることが^あ書いてあるだけだった。

^{ほんとう げん き}本当に元氣ならいいんだけど・・・

音楽フェード・アウト ♪夏 Summer

265

^{きせい お}帰省を終えて、いつもの^{だいがくせいいかつ もと}大学生活に戻った僕は、これまでの^{せい か}成果を、ある^{きょうじゆ はな}教授に話してみることに決めた。この^{きょうじゆ}教授の^{こうぎ}講義が^{いちばん す}一番好きだったし——^{かれ もっと そんけい}彼は、最も尊敬する^{きょうじゆ}教授の^{ひとり}一人だった。

「おお! すばらしい!

——シンプル! クリアー! エレガント!

ミーニングフル! ユースフル! フルーツフル!

——^{こうふん}さぞ、興奮したでしょう。いいなあ。^{たかし いっしょう いちど}私も、一生に一度は、このような^{せい か}成果を生み出して^だみたかった^だすなあ。

——^{いっしょ よろこ}ぜひ、一緒に喜ばせて^{きょうじゆ}おくれ」と教授。

「——あ、ありがとうございます」と僕。

「もちろん、^{きみ ぎょうせき}君の業績です。^{きみ なまえ どうどう はっぴよう}君の名前で、堂々と発表した^ままえよ。^{ぜんめんでき}全面的に^きバックアップしようぞ。ふあつふあつふあつ!」

「いえ、でも——^{あたら}新しいことが^{なに}何もないような」

「いえ。^{きみ}君は、^{きよくせん}コッホ曲線という^{ぐたいてき}具体的な^{き か}フラクタル幾何、および、^{かいいん}フラクタルの^{つう}概念を通じて—— “^{ぶん や}さまざまな分野”と^{み ちか じん}身近な^{せい あいだ}人生”の間にある^{きょうつうてん}共通点を見^{し ぜん}いだしながら、^{しぜん}自然 nature に対する^{たい}見方を^{かた}バージョンアップさせています。

つまり、^{だれ ぼくぜん おも えが}誰もが^だ漠然と思^{えが}い描いていて、^{はつきり}はつきり^つつかみ^ぎぎれてい^ななかつた^{しぜんかん}自然観を、^{だれ め み ちよっかんてき りかい}誰もが^{かたち}目で見て^{きょうじゆ}直観的に^{かたち ひょうげん}理解できる^{かたち}形、共有^{きょうじゆ}できる^{かたち}形に^あ表現しています。

これは、^{いま}今まで、^{だれ}まだ誰も^{かた}やったこと^きの^{きょうせき}なかつた^か画期的な^{きょうせき}業績^{きょうせき}ですぞ」

「——はあ。まあ——。でも——」・・・ 「^{まちが}間違えているかも」

「私を含め、誰もが、ときには間違えてしまう—— そのような存在です。なぜなら、誰もがみな、生身の人間ですから」

「——」

「間違いに気づきうるからこそ、本物なのですぞ。」

「すこぶる健全な営み——」

「——」

「それに何より、この学問、いえ、あらゆる学問の土台となりうるネイチャー・シゼン・アラ・チ・アイ・イナ・アラ・ナチュラル・フィロソフィー・アラ・シゼン・チ・アイ・アラ・プリンシプルス・オブ・ナチュラル・フィロソフィー、新たな自然知愛、および、新たな Principles of Natural Philosophy、新たな自然知愛原理は、単に間違えているに
しては、あまりにも調和的すぎる」

「——知愛？」

「知識や知恵を含む知を愛すると書いて知愛——。これまで哲学と訳されることが多かったフィロソフィー・アラ・ヤク・デツガク
「——僕は、哲学、知愛を学んでいませんし、知愛をしているつもりも、全然ありませんでした」

「ふあつふあつふあつ。知らず知らずに、ほとんど0からやっていたからこそ、まさに、本来のPhilosophy、知愛なのですぞ」

「——」

「——」

「——」

266

「君の、この成果は—— “従来の学問や教室の、伝統やしがらみ……から距離を置く、自由な立場の君” だったからこそ、生まれたのか

もしれないですね。そのことは、決して引け目に感ずるべきことではなく、実は、すばらしい魅力の1つなのですぞ。

——もっと、自信を持ちたまえ。ふあつふあつふあつ！」

「——。はあ——」

「7つのワクワク枠、The 7 Frames For All Life—— これは、人が生きるためになったり、学問を応援してくれたりするだけでなく、広く役立つでしょう。」

つまり、何よりの魅力の1つは、この応用範囲の広さなのです。

これは、文化を越え、言語を越え、社会を越え、生物種を越え…応用できる普遍的な土台です。

あらゆる学問、あらゆる生態現象、あらゆる社会現象、あらゆる人間の営み、あらゆる生命現象、あらゆる化学現象、あらゆる物理現象…が、この共通の土台を利用して説明されうるということ——人類は、かけがえのない“普遍的なメタ・パラダイム”に相当するフレーム、すなわち、具体的なパラダイム作りやフレームワーク作りに役立つツールを手に入れたのです。むろん、それは、この地球上のライフみんなが手に入れたも同然——」

「——」

267

「この“普遍的なメタ・パラダイム”に相当しているフレームは、みんなが進んでいる航路が間違っていないかどうかを教えてくれる、

まさにコンパスを提供できるフレーム、Compassable Framesです。

また、例えば、ある人間社会の営みの是非についての判断を助けてくれたり、ある人間社会の存在意義を明確にしてくれたりするためのツールとしても使えるでしょう」

「——」

「君は、とても意味あることを成し遂げたのですぞ。胸を張りたまえ」

「——。あ、でも、僕は、ただの学生で、専門家でないですし——」

「ふあっふあっふあっ！ 専門家でなければ学問してはならないとでも君は本気で思っているのですかな？」

もちろん、専門家、スペシャリストも今後とも重要な存在であり続け、専門家にしかできない学問があり続けます。

しかし、一方で、非専門家、ジェネラリストも重要な存在であり続け、非専門家にしかできない学問もあり続けるのです」

「——。はあ——。でも、この7つのワクワク粋自体は、もともと、おじいさんが教えてくれたものでして——」

「おじいさん？」

「はい。地元に住んでいる“実の祖父が曾祖父”のような存在の方です。彼は、今、航海に出ているらしく—— どこにいるのかも、わかりません」

「——そのおじいさんの年齢は、わかりますか？」

「えっと、おそらく—— 今は、少なくとも、80歳から90歳くらいじゃないかと——」

「——。——うん。ぜひ発表しなさい。君の言葉で—— 君の名前で——。きっと、そのおじい様も、とても喜ばれることでしょう」

268

大学3年の初秋——

音楽イン ♪秋 Autumn

その発表が、数日後に迫っていた。

それは、僕にとって全く初めての経験で、漠然とした不安が僕を包み込んでいた。

瑠音と僕は、キャンパス内の、木の葉がわずかに色づき始めていた並木道を歩いていた。

「どうしたの？」心配してくれる瑠音。

「え？」思わず聞き返す僕。

「だって—— 元気ないみたいだから——」

「ああ——」

音楽 ♪秋 Autumn 269 に続く

269

瑠音と僕は、その並木道沿いにある、木陰のベンチに座った。

結局、その不安を彼女に打ち明けることにした。

「その発表—— 何となくコワイんだよ」と僕。

「え？ どうして？」と瑠音。

「——。だって、大勢の見ず知らずの方々の前で発表するのは、何となく不安で緊張するというか—— この成果が、かつて夢とし

て想い描いていたような学問そのものではなく、学問の土台となる
 新たな知を愛する営み——新たな Natural Philosophy、新たな自然
 知愛とかに相当しているって言われて戸惑っているというか——

それに、何より、もし間違えていたらって思うと—— ……

「自信ない？」

「自信は——」 …… 「——ある。いや、ない。いや、ある。

いや、ない—— いや」

「フッ。

——“間違えているにしては調和的すぎる” そんなふうに教授に
 言っていたんでしょ？」

「——あ、でも、“私も生身の人間だから間違える”って、応援して
 くださっていた教授自身が話していたんだぜ！」

「——フフッ」

瑠音は、それから、しばらく葉っぱを眺めた。

そして、ふいに口を開いた。

「間違えるって、そんなに悪いこと？」

「え？」

「仮に、もし、どこかの間違いに気づいて“イヤだな、悪いな”とおも
 う部分を見つけたのなら、“いいな、好きだな”と思えるまで、
 その部分を改善すればいい—— それだけの話じゃないかなあ。

そうやって、バージョンアップを重ね続けられればいいのよ」

「——」

「もちろん、間違えない努力も、とても重要なことよ。

でも、それと同じくらい、いえ、それ以上に重要なことは——

“間違いに気づこうとする態度”と“気づいた間違いをどう活用す
 るか”じゃないかしら？ そのほうが、結果的に、より真実に近づける
 はずだし——」

「——」

「それに—— これは“生きる力”と一緒に、ほかならぬ第7フレー
 ムが教えてくれる、すてきな知恵の1つでしょ？」

「——うん。まあ——」

「責任を持って対応し続けられればいいのよ。

まさに愛し続けられればいいの——。これまで通り、これからも。

——きっと、成熟に向かっているライフにとっては、間違いは通
 過点にすぎないのよ。間違いをうまく活用できれば、それだけ、よ
 りよく改善できるんですもの」

「——」

「それに——」

「それに？」

「——ううん。何でもない」 瑠音は視線を外しながら言った。

音楽フェード・アウト ♪秋 Autumn

270

心地よい、そよ風が、瑠音と僕を時折包み込んでいた。

——しばしの沈黙を破り、僕は口を開いた。

「確かに、君の言う通りだよ。もし、間違いをうまく活用できれば、

改善かいぜんにつながる——」・・・「ただ——」

「ただ？」と聞き返す瑠音。

「うん。ただ、結局は——僕自身の心の中のハードルも含めて、いろいろなハードルを自分の力でコツコツ乗り越えなきゃ始まらないのかもね。

何だかんだ言っても、結局は、自分の力で、一步一步、坂を上り続け、それを乗り越えなければ、何にも始まらないのかも——」

「——」

彼女は何も言わないまま、しばらくの間、ぼんやりと遠くを眺め続けた。

271

「——フッ」瑠音は、ふいに笑い出した。

「え？ どうしたの？」と思わず尋ねる僕。

「ねえ、覚えてる？」瑠音は明るく尋ね返した。

音楽イン ♪心地よき日々 Comfortable Days

「え？ 何を？」

「高校生のとき、私が、毎朝、あの上り坂を、自転車を引きながら歩いていたこと——」

「ああ、覚えているよ」忘れるわけがなかった。

「どうして、いつも、ああしていたか、わかる？」

「——え？ やっぱ、体力に自信がなかったからとか、しんどかつ

たからとかじゃない？」

「そう。それも、確かにあったわ。でも——実は、ほかにも理由があったの」

「——どんな理由？」

「——うん。私——あなたに会えたからなの。

ほんの一瞬だけだね。アハッ。——毎朝、ああして、自転車を引いていると、あなたとふたりきりで会える確率がグーンと高まることを発見していたのよ」

「え？」意外だった。

「私——毎朝、あなたに、あいさつしてもらえるのが、すごく嬉しかった——」はにかみながらの彼女の笑みがコスモスのように色づいているのがわかった。

「——」

「だからといって、教室とか、廊下とかじゃ、ふたりきりになれるはずもなかったし——あの頃、そういうのって、なかなか恥ずかしかったじゃない？ だから——あれは——私が、それを楽しみにしながらやっていたことなのよ。——アハッ♪ そう言う意味では、私、坂を上るのも好きだったのかもね？」

「——」

「——あれ？ 私、なんで、こんな話、始めたんだっけ？」はにかみながら、瑠音は、しばらく戸惑った。

音楽フェード・アウト ♪心地よき日々 Comfortable Days

「あ、そうそう、そうよ。だから、あなたが、今、そのような感じで“しんどい坂”を一步一步上っている間にも——きっと、何ら

かの喜びとか楽しみとかを見いだせるかもしれないよってことを
言いたかったのよ」

「——」

「——それに、誰が何と言ったって、私は、あなたの味方よ。ずっと——」

わたしが、——愛しているから。

これまでのあなたも、これからのあなたも——

——だから、余裕よ。アハッ♪」 瑠音は明るく心笑んだ。

このとき、彼女の愛がフラッシュバックした。

音楽イン 後半のサビの部分から ♪秋 Autumn

校舎内を水着姿のまま走る瑠音——

その後も、いつもと変わらずあいさつする瑠音——

自転車の荷台を押して走る瑠音——

「きつと、本屋さんに行ってみるといいよ」とアドバイスする
瑠音——

「——おーい！」と、赤ちゃんを抱っこしながら励ましにくる
瑠音——

「大好きいー!!」と、海に向かって叫ぶ瑠音——

再び目を閉じる瑠音——

「もう、本当に、がんばり屋さんなんだから——」と言いながら
赤ちゃんコンパルンクルを引き受ける瑠音——

「そんなあなたが——好き」と支持する瑠音——

「すごいことよ。きつと大発見よ！」と褒める瑠音——

...

そして——

「誰が何と言ったって、私は、あなたの味方よ。ずっと——」と励
ます瑠音——

瑠音の笑顔が、声が、ことばが、優しさが、心が……

彼女のすべてが、表現できない美しさに満ちあふれているように
感じられた。

彼女がいとおしかった。

彼女の存在が奇蹟的に感じられた。

このとき初めて—— 瑠音が自分以上に大切な、この上ない宝で
あることを実感し、その存在に心から感謝した。

このとき、もうすでに—— “しんどい坂を上る過程での喜び”
を、十分すぎるほど、すでに見いだせた気がした。

音楽終了 ♪秋 Autumn

272

いよいよ、生まれて初めての研究発表の当日——

その日は、ちょうど、彼女にとっての大切な試験の日と重なって
しまっていたので、瑠音は発表会場に乗られなかった。

瑠音と僕は、お互いの成功を祈り、お互いに“手作りのお守り”
を交換し合っていた。

それでも、演台の上に立った僕は、えらく緊張していた。

おそらく教授が宣伝してくれたからか、会場は多くの人たちであふれ返っていた。

それでもシーンと静まり返っている会場——

注がれる多くの視線—— バクバクと高鳴る鼓動——

僕は、ポケットの中の—— 彼女のお守りを握り、それから、おじいさんの丸い石のお守り“アインシュタイン”を握った。

そのときだ。ある人影の、例のしぐさが目に入ったのは——

!!!

観客席の中の、そのしぐさの正体に僕は歓喜した。

なんと、おじいさんが、片方の手を左右に大きく振りながら、もう片方の手の親指を上に入れて前後に動かしながら、頭を少し横に傾けながら、こちらに向けて、心笑みかけているのではないか！

音楽イン ♪ハーモニー Harmony

ああ、元気だったんだあ。そして、来てくれたんだあ。

——ありがとうございます。ありがとうございます。

涙が、にじみかけた。

“ゆっくり、ゆったり深呼吸”を繰り返した僕は—— 気持ちが落ち着いた状態で口を開いた。

心笑みながら——。

「——この発表を、地元の偉大なおじいさんへ捧げます」

会場が少しざわめいた。

おじいさんは両腕いっぱい大きな円を空中に描き始めた。

「——もちろん、この会場にいらして下さった皆様方へも」

うなずきながらジェスチャーを繰り返すおじいさん。

——え？

「あ、それから—— それから—— できれば、これからは力を合わせながら、ずっと一緒にライブをエンジョイしたい愛しい人へも捧げます」

うなずきながらジェスチャーを繰り返すおじいさん。

「それから、それから——

親友や——

愛犬や——

育み支えくれた家族たち——

優しく励ましてくれた親戚たち——

お世話いただいた先生方——

多くの時間をともに過ごしたクラスの仲間たちへも——

ここにおられない、すべての方々たちへも——

さまざまな知恵や勇気を与えて下さった、本の著者の方々へも——

さまざまな感動や楽しみを与えて下さった、あらゆる作品の誕生を支えて下さったの方々へも——

…

懸命に、今を生きているの方々たちへも——

ここまで僕らを育てて下さった、過去を生きたの方々へも——

かぎ かのうせい みらい い かがたかた
限りない可能性があふれる、未来を生きる方々へも——

しゅっしん ち せ だい じ だい ねん だい せい べつ が っ けう しょく ぎょう
出身地も、世代も、時代も、年代も、性別も、学校も、職業も…

あらゆる肩書きの壁を乗り越えて——

すべてのライフへ——

けい い かん しゃ こ
敬意と感謝を込めて——」

音楽 ♪ハーモニー Harmony 273 に続く

273

ち きゅうじょう み ごと ぜつみょう せいたいけい なか じんるい おん めぐ
「この地球上の見事なまでに絶妙な生態系の中で、人類が、恩や恵
みやフルーツや愛を受けとる一方—— そのような時代は、すでに
お 終わりました。

なんじゅうおくねん れきし かか ちきゅう
この、何十億年も歴史を抱える地球——

さいこう せつさく うつく せいたいけい なか おん めぐ
その最高傑作である美しい生態系の中で、恩や恵みやフルーツや
あい う と いっぼう じんるい ほう せつきく へき あた
愛を受け取る一方ではなく、われわれ人類の方からも積極的に与え
ていく—— そのような時代が、もうすでに始まっています。

もはや——

かじょう かりやくかん かじょう じ こちゅうしんせい じ こそうしつ
過剰な“ストレスや無力感”、過剰な“自己中心性や自己喪失”、
かじょう ひかん らつかん ふ まわ ほうこうおんち じょけたい
過剰な“悲観や楽観”…に振り回されるままに、“方向音痴”状態に
おちい ぼ あい
陥っている場合ではありません。

けんきょ つう し ぜん ネイチャー ちやうわ
たゆまぬ謙虚さを通じて、自然 nature との調和性を高めること
たんきゅう つづ いとな かずかず
を探究し続ける営みの数々に——

かいぜん つう かくほうめん め ぼ ぞう だ つづ
たゆまぬ改善を通じて、各方面で芽生え、育ち続けている、すば
らしい発展の数々に——

おん めぐ あい ぞうふく かくさん つう すこ
たゆまぬ恩や恵みやフルーツや愛の増幅と拡散を通じて、健やか
ぜんじんるい たんじょう かてい かずかず
な全人類レベルのライフが誕生する、その過程の数々に——

…

ゆるぎない支持こそが、与えられ続けなければよいなと思います。

ち きゅうじょう せいたいけい
この地球上の生態系レベルのライフのために——

さらなる恵みを与える

ちしき ち え
知識や知恵が

い し いよく き よつきやう
意志や意欲、やる気や欲求が

そして、その実際の営みや成果が

こんご おお ばく
今後とも大いに育まれる——

その“フルーツ育て”と呼べるプロセスが促されるために、この
はつげい すこ こんけん
発表が少しでも貢献できれば、とてもうれしいです。

ひろ う ちゅう なか せんざい
この広い宇宙の中で、もしかしたら、すでに存在しているかもし
てんたいせいたいけい
れない、ほかの天体生態系レベルのライフのためにも——」

いっしゅん いっ か すがた こころ う
一瞬、コンパース一家の姿が心に浮かんだ。

もしかしたら、将来、われわれが誕生させられるかもしれない、
てんたいせいたいけい
新たな天体生態系レベルのライフのためにも——

この地球生態系レベルのライフのためにも——

一瞬、丸みを帯びた地球の姿が心に浮かんだ。

地球上の多様な種、個体社会レベルのライフのためにも——

一瞬、ランプベリーの姿が心に浮かんだ。

「将来、ぜひ誕生してほしい、健やかな全人類レベルのライフのためにも——

多様な人間社会レベルのライフのためにも——

...

多様な人間レベルのライフのためにも——

見知らぬ誰かのライフのためにも——

身近な誰かのライフのためにも——

親友のライフのためにも——

一瞬、心笑君の笑みが心に浮かんだ。

「恋人のライフのためにも——」

一瞬、瑠音の笑みが心に浮かんだ。

「家族のライフのためにも——」

一瞬、家族の笑みが心に浮かんだ。

「自分自身のライフのためにも——

...

みんなのライフのためにも——

細胞社会レベルのライフのためにも——

細胞レベルのライフのためにも——

...

生体高分子社会レベルのライフのためにも——

生体高分子レベルのライフのためにも——

...

健康のためにも——

目先の将来のライフのためにも——

長い将来のライフのためにも——

過去を担った方々のライフのためにも——

未来を担う子供たちのライフのためにも——

今を担う私たちのライフのためにも——

そのような For『In』 & For『Out』の境地——

すべてのレベルの、すべてライフを愛する境地——

For All Lifeの境地——

いつもここにいられば、

すべてのレベルの、すべてのライフに愛されながら、

いつも心から笑っていられ、

何十倍、何百倍もうれしくなれるのです。

この知恵の実践のために、

このライフのパズルを解く究極のカギを活用するために、
この発表が少しでもお役に立てれば、
私自身も、何十倍、何百倍もうれしいのです」

おじいさんの笑みが見える——。

自身の笑みが感じられる——。

みんなの笑みが感じられる——。

やっぱり、ワクワク粋だぜ！

やっぱり、フレー！ フレー！ フレームだ！

そうだよね？ おじいちゃん。

音楽そのままエンドロールへと続く
♪ハーモニー Harmony

7つのワクワク粋 / The 7 Frames For All Life

みんなのコンパス③

第7フレーム

『  』

【完】